求道

第五卷　第拾號

明治四十年十一月二日（第三種郵便物認可）　明治四十一年十月一日發行（毎月一回一日發行）

求道第五卷第拾號目次

求道

◎如來は無碍也

◎信仰即修養

感謝

◎凰聲鶴駕◎舊友溫情◎山河と人機◎藤崎◎秋田◎山形◎若松◎感恩感謝

講話

◎如來の清淨願心　近角常觀

雜錄

◎予が實驗の信仰に就て　近角常觀

講義

◎他力信仰の淵源

二　念佛と信仰

歎詠

◎秋の日　八風

◎秋の夕　甲之

◎デヴァスの曲　八風

時報

◎東北傳道

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
《本郷森川町一番地》

毎土曜午後二時
第二求道會
《九段坂佛教倶樂部》

毎月二日午後七時
第三求道會
《日本橋蠣殼町說教所》

求道　第五卷　第拾號

如來は無碍也

人生唯如來を信ぜよ、如來を信ぜずしては人生何事も成るものはない、何んとなれば如來は實に盡十方無碍の光である、換言すれば絶對の威力である、無限の慈悲である、無邊の智慧である、此の如き大威力、大慈悲、大智慧を信じて立てる已上は人生如何なる所も安心である、盡十方無碍光如來とは此如來の眞の御姿である、此如來に歸命し奉りてみれは人生到る所、絶對の平安である、究竟の信賴である、絶大無限の威力を加へらるゝのである。

念佛者は無碍の一道である、何んとなれば此無碍の如來を信ずるからである、此無碍の力は實に三世に通じ、十方を盡して、行き渉らざる所はない、彼佛の光明無量にして十方の國を照すに障碍する所なし、故に號して阿彌陀と爲す、此如來を認めたる已上は安心するなと云ふも安心せずには居られぬ、何んとなれば其光の中に攝取せられて脫することは出來ぬのである、其光明は無邊際の大なるのみならず、無量無限の細小なる所まで行き渉りてある、言ひ換ゆれば如來は十方微塵世界の念佛の衆生を觀そなはすのである、此大慈大悲の如來が我等を觀そなはすに何事か心配あるべき、佛の本願力を觀そなはすに過ふて空しく過ぐるものなし、此無碍の如來が本願力を以て我等を觀そなはしたまふのである、我等は一たび此本願力に遇ひたてまつりたる以上は空しく過さんとするも得べからざるのである。

天親菩薩が歸命盡十方無碍光如來と宣ひたるを曇鸞和尙は釋して是恰も孝子の父母に歸するが如く、忠臣の君后に歸するが如きものである、釋尊は父の如く、彌陀は母の如し、盡十方無碍光如來とは實に大慈大悲の母の懷に抱かれたる心地である、既に身を此慈父悲母に托したる已上は、動靜起居一に自己の計にあらず、出沒進退皆君父の御思召に從ふ如くである、既に此の如く如來の御恩を知りたる已上は、唯日夜念佛して、所作云爲偏に此如來の恩德を感謝すべきである、夫故に天親菩薩も淨土論の初に先つ啓白して、歸命盡十方無碍光如來と宣ひたるのである、又人生に於て此大安心を得る決して輕きことにあらず、若し如來威神力を加へたまふに非ずん

ば、如何にしても達することは出來ぬ、即ち如來の大威神力あればこそ其佛意が我等に達して我等が如來に歸命する次第である。其神力を乞ひて加へられたものゆへに、我等罪惡の衆生如來の子として、仰て告白して歸命盡十方無碍光如來と申す譯である、信卷に乃し如來の加威力に由るか故に、博く大悲廣慈の力に因るか故に、偶〻淨信を獲れば是心顚倒せず、是心虛僞ならず、是を以て極惡深重の衆生大慶喜心を得て、諸の聖尊の重愛を獲る也とあるが、特に此點を顯著に示されたるものである、加威力とは即ち絕大無限の威神力を加へらるゝのである、大悲廣慈の力とは即ち無量無限の慈悲、廣大無邊の智慧である、此の如き如來無碍の力が我等に達して下された爲に、我等の胸中に淸淨の信心を獲得するのである、既にかくの如き無碍の力なるが故に、飽まで顚倒することなく、少しも虛僞なることもなく、吾人極惡深重の衆生が此如來の親に歸命して、攝取の慈懷に抱かれ大慶喜心を生し、釋迦彌陀二尊の父母を初として、諸佛菩薩の聖尊の甚重なる慈愛を蒙るのである、そこで親鸞聖人は此天親曇鸞に私淑して歸命盡十方無碍光如來と同意味を以て、正信偈の初に歸命無量壽如來、南無不可思議光と申された次第である。吾人は朝暮佛前に於て恭しく之を拜誦する所以のものは、即ち孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸するが如く、寢起就寢の時如來慈親の前に敬虔の誠を致して啓白奉告する次第である。

吾人は此の如く如來を信じながら、人生上のことにつきて少からず心を惱まし、不安に陷ることがある、言ひ換ゆれば人生諸の障碍に對して、我等は如何にして切りぬけ通るべきかにつきて心配することがある、是れ畢竟無碍の如來を信じながら、何時の間にやら、有碍の小智を以て計ひつゝあるのである、如來の智慧海は深廣にして涯底なし、二乘の測る所に非ず、唯佛のみ獨り明らかに了りたまへり、人生の何事にても如來の御親の手許にてはよろしき樣に取扱はれてあるのである、我等親を信じたる已上は何も心配するに及ばぬのである、しかるに夫を心配するはいらざる心配をするのみならず、一たび親を信じながら再び親を疑ふ樣なものである、既に無碍の如來を信ずれば、自然我身の上に無碍自在の德を與へらるゝのである、我等信仰已前の生活は如何に如來を信じて立たんと欲しても危險の如く感じて、とても立つことは出來ぬ、しかるに一たび如來を信じたてまつれば、いかにも危險であるかの如く思へても、信仰の力で無碍に通りぬけること

とが出來るのである、我等は過去に於ける自己の行路に顧みて慚愧止みがたきと共に、感謝の涙に堪へぬ次第である、我等は一たび如來を信じながら、人生周圍の事情が暗澹として自分を包み來るときは、忽ち計ひ心を起して色々と疑を起し、慮を起すのである、これ實に上に陳べたる如來の加威力を忘るゝのである、無限の慈悲をなきものにするのである、廣大の智慧に背くものである、過去を回想するに吾人は常に此過失を繰返しつゝあるのである、是顧みて慚愧に堪えぬ次第である、しかるにも拘はらず、一たび無碍の如來を信じたる已上は其計ひ心の方に從ふことが出來ぬ、其疑や慮の方に組みすることが出來ぬ、いつも如來を信せずして過ぐることが出來ぬ、恰も無理に手を引かるゝ心持で止むなく如來を信じて通り過ぐるのである、危き所を惡しき方に陷らずして如來の方へ引かれてゆくのである、橫截五惡趣、惡趣自然閉、昇道無窮極、易往而無人、其國不逆違、自然之所牽とあるは、如何にも信仰生活の眞相である、是既に無碍の如來の力である、無碍光の利益より、威德廣大の信をえて、かならず煩惱のこほりとけ、すなはち菩提のみづとなる、心配や計ひの煩惱が融けて歡喜感謝の水となるのである。

かく絕對の安慰、無限の平安、究竟の信賴を得るのみならず、最も驚くべきことは事實的に一切の障碍を打破りて、無碍自在の境界が實現し來るのである、此に於てや所謂無碍の一道が事實的に顯現し來ることである、先きに計ひを以て、心配を以て、疑と慮とを以て待設けたことが却て消滅し去りて、豫期せざる新光明が人生上に現はれ來るのである、若し其暗黑の暗ければ暗き程、必ず後に其已上の光明が來ることは期して待つべきである、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善も及ふことあたはざるゆへに無碍の一道なりとの事實を、眼前に見ることが出來るのである、此に至りて計を挾み、凡小の淺智を以て人生のことを律せんとしたることを慚愧して、無碍の佛智の深廣なることを驚嘆感謝するの外はない、和讃に曰く、光雲無碍如虛空、一切の有碍にさはりなし、光澤かふらぬものぞなき、難思議を歸命せよ、實に如來の無碍なること虛空の如く、曉の雲輝きて宿霧忽ち去り、曙光四天下を照すが如く、一切の有碍にさへられぬのみならず、却て其有碍を照すのが光澤である、是れ實に無碍難思の光耀である、略文類に聖人が一生實驗の跡が歷々とあらはれてある。曰く慈悲深遠

にして虚空の如く、智慧圓滿にして巨海の如し、(乃至)普く難思無碍の光を放て、能く無明大夜の闇を破りたまふ(乃至)彌陀の佛日は普く照耀す、已に能く無明の闇を破ると雖、貪愛瞋嫌の雲霧、常に清淨信心の天を覆へり、譬へは猶し日月星宿の、煙霞雲霧等に覆はると雖、其雲霧の下明らかにして闇なきが如し、信知するに日月の光益に超へたり、必す無上淨信の曉に至れば、三有生死の雲晴れ、清淨無碍の光耀朗かにして、一如法界眞身顯る、發信稱名すれば光攝護したまふ、亞現生無量の德を獲しむ、無邊難思光不斷にして、更に時處諸緣を隔つることなし、諸佛の護念眞に疑なし、十方同しく稱讃し悅可す、此に至りていかにも盡十方無碍光の德が窮まりてある、和讃に白く、十方三世の無量慧、おなじく一如に乘じてぞ、二智圓滿道平等、攝化隨緣不思議なり、彌陀の淨土に歸しぬれば、すなはち諸佛に歸するなり、一心をもて一佛を、ほむるは無碍人をほむるなり、是即ち世尊我一心歸命盡十方無碍光如來と讃したまふ所以である、人生唯無碍の一道南無阿彌陀佛の存在したまふ所以である。

信仰即修養

今日世間にて用ゐる修養といふ言葉は、畢竟我等が色々と工夫訓練して、我心を修め養ふことを意味するので、未だ絶對の信仰に達せざる間に於ける自力修養の事てある。此意味なれば修養といふことは、常に私が言ふところの自力律法主義のことてある。即ち諸行諸善、雜行雜修、あらゆる自力のはからひを意味するものてある。切言せば未だ如來の大悲を見出さぬまてに、種々につとむる修養は皆是てある。かくの如き自力修養の功果を追うて居る間は、迚も絶對の御惠みを見出すことは出來ぬ。即ち此の如き企ての全く無効なる極限に達したるときに、初めて無限大悲の願力を信じたてまつる次第てある。此意味より言へは、修業といふ言葉は寧ろ斥くべき言語てある。即ち今世流行するところの修養の語は、絶對信仰の立場より見れば頗る戒心すべき言葉てある。若し極端に言ふならば、信なくして勉むる修養なるものは、知らず識らずの間に僞善に陷る虞があるのてある。これ他力信仰の上より最も用心すべき點てある。

若し之に反して修養といふことを信後相續の意味とすれば、

最も必要なることてある。併夫にしても信其物を離れて修養がある樣に考へ易きものてある。勿論道理上より言へば、信後相續といふのに、信を離れて成立つ筈はなけれども、若し信が眞實の信に非ずして、自分の心て假設した信てあれば、修養は其信より發動する相續に非ずして、假設の信て物足らぬ故に、其上に附け加へらるゝ自力修養に過ぎざることゝなる、是れ前の場合よりも猶一層警戒を要する點てある。兎角從來眞宗の信者が、動ともすれば一念と後念と大に趣を異にするものてあるかの如く考へ、又眞諦門の外に俗諦門を附け加へることの樣に考へるのが、全く此誤より來りたものてある。假設の信にして、未だ眞實絶對の信を見出さぬなれば、實際に於ては前の場合と同一なれども、前の場合は信仰を認めずして修養を立場とするものゆへに、其立場を翻へして信仰に入る機會が多い。されと後の場合は假設にしても、信仰を認めての上に修養を附け加へて置くのてあるから、其假設の信、附け加への修養を翻へして、絶對眞實の信仰に入らねばならぬ。其所に氣の附くことは餘程困難てある。

かく自力修養や、附加への修養を回へして、眞實の修養なるものは如何と云ふに、畢竟絶對の信仰の立場にて、念々刻々其大悲を仰ぎつゝ、繼續する所の信仰相續の有樣てある。切言せば世間一般には修養的と見做さるゝ言語が、即ち信仰其物を意味することゝなる。蓮如上人御一代聞書には、此意味に於ける修養即ち信仰を餘蘊なく、しかもきはとく示されてある。今其五六の實例を數へて見れば、

一、一念の信心をえてのちの相續といふは、さらに別のことにあらず、はじめ發起するところの安心に相續せられて、たうとくなる一念のこゝろのとをるを、憶念の心つねにとも、佛恩報謝ともいふなり、いよいよ歸命の一念發起すること干要なりとおほせさふらふなり。(第三十條)

是即、後念相續は初一念の繼續反覆に過ぎずして、修養即ち一念發起の信仰其物を干要とすることを切言されたのてある。

一、法敬申され候、たうとむ人より、たうとがる人ぞ、たうとかりけると、前々住上人仰られ候、面白きことをいふよ、たうとむ體、殊勝ぶりする人は、たうとくもなし、たゝ有難やとたうとがる人こそたうとけれ、面白きことを云よ、もとものことを申され候との仰事に候と云云。

(第二百五十三條)

修養はたうとむ體、殊勝ぶりすることになり易し、如來の御惠

みを仰げは、たうとまざるを得ざるべし。蓮如上人が無紋の衣、墨の黒き衣を殊勝さうにみゆるとて嫌ひたまひしは、此がためなり。墨の黒き衣をきて御前へ參れば、衣紋たゞしき殊勝の御僧と仰せられて、いやわれば殊勝にもなし、たゞ彌陀の本願殊勝なる由仰せられたのを讀む毎に、いかにも極端に思ひ切つて信のなき修養を、嚴しく戒めたまひしを感ずる次第である。

一、信をば得ずしてよろこび候はんと思ふこと、たとへば糸にて物をぬふに、あとをそのまゝにてぬへば、ぬけ候やうに悅び候はんとも、信びをえぬはいたづらことなり、よろこべ、たすけたまはんと仰られ候ことにてもなく候、たのむ衆生をたすけたまはんとの本願に候。(第二百二十條)

喜びたい〳〵と、喜びを先にすると、自力にて實驗せんといふことになりて、いつの間にやら自力修養に陷るのである。喜ぶのが目的ではない、如來の親にたよる一念の信が干要である。

一、人に佛法の事を申てよろこばれは、われはその悅ぶ人よりもなをたうとく思ふべきなり、佛智をつたへ申すによりて、かやうに存ぜられ候事と思ひて、佛智の御方を有難く存ぜらるべしとの義に候。(第二百七條)

一、信治定の人は、誰によらず、まづみればすなはちたうとくなり候、是その人のたうときにあらず、佛智をえらるゝゆへなれは、いよ〳〵、佛智のありがたきほどを存すべきことなりと云云。(第二百十條)

一、同仰に云く、心得たと思ふは心得ぬなり、心得ぬと思ふはこゝろえたるなり、彌陀の御たすけあるべきことのたうとさよと思ふが、心得たるなり、少も心得たると思ふことはあるまじきことなりと仰られ候、されば口傳鈔に云、さればこの機のうへにたもつところの彌陀の佛智をつのりとせんよりほかは、凡夫いかでか往生の得分あるべきやといへり。(第二百十三條)

喜ぶも、たうとむも、我等のはからふへきことでない。皆佛智の不思議である。人に法を說くも少しも我力はない、自分が心得たなど思ふが大なる横着である。皆佛智よりしらして下さつたのである。聖人の所謂如來の加威力である。大悲廣慧の力である。たゞ一文不知の身も信ある人は佛智を加へらるゝ故に、佛力にて人が信をとるなりと仰せられたが此點で

ある。吳々も有難がつたり、たうとがつたり、喜んだり、殊勝がることに目をつけてはならぬ。夫等に目をつけると、知らず識らず自力修養に陷ることになりて、信が空虛になる。警戒すべしといふは此所である。

一、人のこゝろえのとをり申されけるに、わがこゝろは、たゞかごに水を入候やうに、佛法の御座敷にてはありがたくも、たうとくも存候が、やがてもとの心中になされ候と申され候所に、前々住上人仰られ候、そのかごを水につけよ、我身を法にひたゝをくべきよし仰られ候、萬事信なきによりてわろきなり、善知識のわろきと仰せらるゝは、信のなきことをくせごとゝ仰られ候事に候。(第八十九條)

水を籠に入るゝは自力修養也。籠を水にひたゝおくは他力修養也。自力修養て難有がつても、たうとがつても、信がなくては駄目である。何がわろきといふも、信なき程のわろきことなし。信なくば善も惡も皆わろし。

一、信をとらぬによりてわろきぞ、たゞ信をとれと仰られ候、善知識のわろしと仰られけるは、信のなきことをわろしと仰せらるゝなり、然者前々住上人、或人を言語道斷わろきと仰られ候ところに、その人申され候、何事も御意のごとくと存候と申され候へば、仰られ候、ふつとわろきなり、信のなきはわろくはなきかと仰られ候と云云。(第百八十六條)

信のなきこれ絕對にわろきなり、言語道斷わろきなり。自分の言ふことに從ふの從はぬの、その樣なことは世間の俗事じや。法律的に師長に奉事しても何の所詮もなし。親鸞聖人の選擇本願を信じたまひしは、法然聖人め選擇本願を信じたまひしものにて、奉事師長にあらず。奉事師長は孝養父母と共に、擇び捨てられたる諸行即ち自力修養の隨一なり。

一、蓮如上人仰られ候、何たる事をきこしめしても、御心にはゆめ〳〵不叶なり、一人なりとも人の信をとりたるをきこしめしたきと、御ひとりごとに仰られ候、御一生は人に信をとらせたく思召れ候由仰られ候。(百八十七條)

信の一つを我等にとらせんが爲の一代の御苦勞なり。其信の一つを頂きたるものは、亦絕對の報謝も出來るなり。

一、善智識の仰成とも、成るまじきなんど思ふは、大なるあさましきことなり、なにたる事なりとも仰ならばなるべきと存すべし、此凡夫の身が佛になるうへは、さてな

るまじきと存ずることあるべきか、然れば道宗近江の湖を一人してうめよと仰候とも、畏りたると申へく候、仰にて候はゞならぬことあるべきかと被申候。（百九十二條）

信の結果として、たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、地獄におちたりともさらに後悔すべからず候とあると同じく、如何なる無理でも、背かんとするも背かれぬのが即信の上の師教隨順である。

一、前々住上人御病中に兼譽兼綠御前に伺候して、ある時尋申され儀、冥加と云事は何としたることにて候と申せば、仰せられ候、冥加に叶と云は、彌陀をたのむ事なるよし仰せられ候。（第二百六條）

一般世間的修養にて言へは、萬事冥加ならぬはなし。衣食住皆冥加によりて與へられたるものなれば、一粒の米も皆粒々辛苦と感謝するこそ冥加なれ。されど何より先づ大なる冥加を頂かざるべからす。即ち我等が如き罪惡深重のものを、助けたまふ大悲の御恩を受けずして、之を空しくするほど冥加に叶はざることなし。何より此大悲大願を信受するが大冥加に叶ふものと謂つべし。若し此冥加を云云するは、是こそ小善根小修養とこそ言ふべきである。其代りに此大冥加を信受するときは、自然に人生衣食住を初めとして、何事も如來の冥加たらざるはない。衣も南無阿彌陀佛、疊も南無阿彌陀佛、水の一口も、朝夕の衣食も皆如來の御用、紙の一片も佛法領の物、背擺布も佛物と頂くことが出來る。若し信なくて事々物々に冥加を申しても、肝腎の大冥加を忘れるやうでは殘念である。

一、蓮如上人兼綠へ物を下され候を、冥加なきと御辭退さふらひければ、仰られ候、つかはされ候物をは、たゞ取て信をよくとれ、信なくば冥加なきとて佛物を受けぬやうなれども、それは曲もなきことなり、我するとおもふかとよ、みな御用なり、何事が御用にもるゝことや候べきと仰せられ候と云云。（第三百十六條）

かくて各條々々即信仰ならぬものはない。

南無阿彌陀佛、　南無阿彌陀佛。

感謝

鳳輦鶴駕

北海道の傳道を終りて、青森蓮心寺に講話す、東北御巡幸の際嘗て鳳輦を此寺に駐めたまふこと再度、草莽の寒僧何等の幸か行在所を拜し奉り、其隣房に宿するの光榮を荷ふ、而して今年時恰も東宮殿下東北行啓の前に當り、青森已南弘前、能代、土崎、秋田、大曲、新庄、山形、各市都に傳道し、恰も聖德皇太子十七憲法を講題として眞諦即ち世諦の眞義を闡明す、恰も各地鶴駕奉迎準備中其精神的用意に契當するもの、東北の衆庶欣々として草風に靡くが如く、聖德芳馨を渴仰し奉る、洵にこれ皇恩の無窮天地と共に悠久なるに由らずんばあらず、憲章の第三に曰く、詔を承けては必ず謹め、君則之を天とし、臣則之を地とし、天覆ひ地載す、四時順行し、萬氣通することを得と、今年全國歳豐かにして民安し、而して茲に鶴駕親しく億兆をを撫育したまふ、冀くは上和下睦眞諦の第一義を明らかにして以て國運の隆盛に資せんことを、是遠く聖德皇太子の御思召にして亦明治聖代の餘光遐かに八紘を照すの所以たるべし、憲章の第二に曰く、篤く三寶を敬せよ、三寶とは佛法僧也、則ち四生の終歸、萬國の極宗也と南無佛　南無佛。

舊友溫情

今回の傳道舊反に會するの機緣多し、小樽に麻里傳之助君に遇ふ、是れ小學時代竹馬の友也、能代に下妻忍超君に遇ふ、是れ教校時代の友也、函館に青家慈然君に、青森に菊池祐章君、藤野說丸君に遇ふ、是皆兼學部及中學時代の友也、札幌に清川圓誠君秋田に笹原貫軒君に遇ふ、是れ二十年前東京の友也、回顧すれは三十年來の舊友歷々として記憶に現れ來る、而して其間幾多の同窓既に青苔の下に眠れるもの多し、而して予や頑健再ひ此等舊友に邂逅して手を採りて昔遊を語る、洵に隔世の感なくんばあらず、想ひ見る二十五年前京都に學びしの、時半夜智恩院の鐘聲嚴々として鴨河の流と共に學窓に傳はるの時、燈を剪りて和讃の講錄を繙きしことを、菊池祐章君の韻に次して曰く

二十年前燈下親。　無端今日遇知人。

風塵愧我老京洛。　烟雨羨君釣北濱。
自悅心中持信念。　誤傳世上懷經綸。
却思昔日長安夢。　半夜鐘聲月一輪。

當年繙きし和讃は即ち今日信仰上唯一の讃嘆として日夕拜誦し奉る所、實に如來護持養育の洪恩殆んど言語に絕すと謂ふべし。

多生曠劫この世まで、　あはれみかふれるこの身なり、
一心歸命たへすして、　奉讃ひまなくこのむべし。

山河と人機

北海道の茫々たる原野と渺々たる海濱とに目慣れて、何んとなく原始時代に處するの感を爲したるの後本土に渡り、青森に達したるの時、街衢を初め事物總て小規模なりと雖、自ら秩序整然として其間自ら文物備はるものあるを覺ふ、恰も米國の新世界を過ぎて歐州の舊世界に入りたる時の感想に似たるものあり、予嘗て米國を過ぎりて英國に入りたるとき其野外牧場綠青々として寸尺の地も手の屆かざることなきを感じたるか如きものあり、而して東北各市都其氣風の異ること其山河の趣を異にすると稍相似たるものあり、陸奥の丘陵蜿蜒として田園に接し、領る不得要領にして茫漠飾なき所大に面白しと雖、津輕富士の自ら雄を氣取りて居然として構ふる所、其人氣頗る質樸愛すべきも、各豪傑を以て自ら居らんとするに似たり、秋田縣下に入れは山勢俄に變じて何れも起伏屈曲、突兀として聳ゆるあり、槎枒として險しきあり、人亦才氣英發眞に痒を搔くの想あらしむ、其人情の濃かなる人をして喜ばしむるもの深しと、雖其持久の力乏しきを感ぜしむ、山形縣に入るや山皆圓かにして小松の茂れる、恰も土佐畫の山を見るの想あり、其從容として迫らざる所、人情の穩和にして圭角なきを示して餘なし、然れども其弊や緩漫にして信仰問題の如き最後の結局に迫らざるの憾あり、若松は水村山廓別天地を形作り、城壁を固めて時勢に超然たるが如きは、維新の歷史證して明らかなり、其人情の淳厚にして渝らざる、氣節固くして忍耐强きは其空氣の淸らかなると共に淸淨貴ぶべしと雖、眼光遠きを遮さるが爲に、萬事蝸牛角上の爭に趨るは最も惜む所也、以上は一見の下其所感を披瀝せるもの、固より一斑の評言たるを免るべからず、此の如く人の機緣は山河と共に其趣を異にすと雖、今や信仰問題の時運熟し來りて、何れも信の收獲に忙はしきは、正に秋獲黃熟の時季一樣に來れるが如し、是東北全體に通ずる氣運にして、如來矜哀の善巧と宿善純熟の時節來れるものと謂つべし、今や歐州に於て南方羅甸民族の文明は勢力消耗して正にアングロサクソン民族の文明其極に達し、獨逸正に起り、スラブ大に起らんとすと稱す、我國の文明亦東漸して東北亦興らんとす、猶素野の氣風を脫せざるは將來燃燒力を有せる石炭の如し、一たび點火し來れは炎々天を焦すに至らん、況んや宗敎は人生の眞面目を發揮し、信仰は其眞情を披瀝するもの、東北信仰の熾盛ならんとする固に偶然にあらざる也、唯地勢の踢蹐と山河の分劃とは自から氣宇の狹小と、割據の氣風とを養ひ來るが如し、是東北の眞摯率直の美風に伴ひ來る共通の短所なるが如し、冀くは如來攝護の心光必ず其健全なる發育を養ひたまはんことを。

藤崎

陸奥藤崎の寺に講話す、法然上人高弟金光上人菴を結びて念佛したまひし靈跡也、堂前松あり、飛龍の松と名く、上人手植する所也、寺主の請に應し、一絕を賦す、曰く、

七百年前遺愛松。　凌空蒼古似飛龍。
我來傳道奥州地。　追慕上人草庵蹤。

當年の如き交通不便の時、猶邊陬に傳道して一生を終りたまふ、今日の遺弟猛省せざるべけんや。

秋田

秋田穰々として何んとなく富饒豐安の風ある其名に背かざるものと謂ふべし、能代の元氣旺盛なる、土崎の信念發達せる、大曲の覺醒せんとせる各特色あり、能代に和田龍造君に迎へられ、君が故鄕の風光と共に淸秀和熙の情旅中蘇生の想あり、舊友下妻君の寺に宿りて二十年前の昔を回想し、秋田に笹原貫軒君と舊盟を溫め、土崎にある時恰も陰曆八月十五日也、同朋と共に小丘に登臨して去年の今日を回想す、來年の今日亦何の處にか此月を眺めん、夫につけても感謝すべきは盡十方無碍光の御惠みなる哉。

山形

汽車山形縣に入りて新庄に近づく、秋風既に郊野を吹きて樹木既に紅ならんとし、坐ろに旅情を傷ましむ、新庄に着して本澤氏に迎えらる、回顧するに三十六年東北傳道の時、此處にまで到りて、轉して西の方酒田に向ひしが、今や既に六年、

正に北の方北海道の傳道を終りて再び此に至る、其間に於ける大悲の冥祐洵に感謝するに言なからんとす、況んや息子一爾君は久しく學舎の人たりしに於てをや、一日予亦其家庭の人たるが如き感あり、山形に至れは堤鳳麟君を初め、多數の御同朋に迎えられて歡喜極なし、六年前講習會の當時を回想して益々御恩の深重を感謝す、蓋は唯法寺夜は村井家に大悲の親心を說く、家人法悅溢れて春風の坐に生ずるが如し、長崎道友會の發會式に臨み、道に故阿部龍機君の家を過ぎりて佛前に續經す、嗚呼々々。

若松

若松は數年來最も法緣の熟せる地なり、今や第三年の講話開會の運に膺る、本年夏期傳道の最後として四日間十七憲法を講す、回顧すれば高松に廣島に小樽に弘前に詳かに其全文を講し、其他姫路を初め大小各所の講話皆之に及ばざるはなし、而して今や東北に於て鶴駕行啓の前に當りて各市都に之を講し、正に福島市御駐駕の時恭しく遙拜して、今や發駕の地たる翁島を過き、行啓後の若松市に入りて十七憲法を講ず、實に不可思議の宿緣を感謝し奉る、蓋し若松求道會は其團結の鞏固にして信念の堅實なる之を訪ふ毎に感ぜずんばあらざる也、回顧するに第一年に信仰の曙光地平線上にあらはれ、第二年に幾多の風雨反動として起り、第三年に至りて佛日益々輝きて淸淨無碍光耀朗、一如法界眞身顯の感なくんばあらざる也、蓋しこれ、傳道の順序として如來善巧のあらはるゝ好模型也、一夜信仰談話會に予か入信の經驗を說く、何ぞ知らん、是れ九月十七日正に十二年前入信の日ならんとは、而して予恰も此日街頭誕生佛を購ふ、十九日夜歸京、學舍無事、家內健全。

感恩感謝

六月二十八日母を奉して東京を辭し、夏季傳道に出でゝより殆んど三ヶ月、晝夜朝暮如來大悲の恩寵を蒙りて此に無事旅裝を解くことを得たる山嶽の洪恩謝するに言なし、而して其間到る處各地の御同朋より絕對的の態度を以て甚厚の慈愛を同情とを賜ふ、殊に其間深き法緣を慶ぶの機會を與へられ、日夜の眠食、來往送迎、悉く深き同信の御親切溢るゝばかりなる、深く感銘して忘るゝあたはざる所也、しかるに一たび相別れてより旅中匆忙其感謝を陳するに暇なく、歸京來既に一

ヶ月各地御同朋の厚情を回憶して亦益〻感荷の情に堪えず、玆に謹みて感謝し奉る、今や秋正に高ふして求道の好季節となりぬ、東都の學舍亦常に御同朋を以て滿たさるゝに至り、ぬ、各地御同朋も亦聞法の好時節たるべし、況んや聖人の御正忌に近くに於てをや、冀くは唯々如來の洪恩を四海同一に念佛して粉骨粹身報謝の誠を致さん哉。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

念佛をとゞめられさふらひしが、世にくせごとのなこりさふらひしかば、それにつけても、念佛をふかくたのみて、世のいのりにこゝろにいれて、まふしあはせたまふへしとぞおぼえさふらふ、御文のやうおほかたの陳狀、よく御ぼからひどもさふらひけり、うれしくさふらふ、證じさふらふところは、御身にかぎらず、念佛まふさん人々はわが御身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため、國民のために念佛をまふしあはせたまひさふらはゞ、めでたくさふらふ、往生を不定におぼしめさん人は、まづわが身の往生をおぼしめして、御念佛さふらふべし、わが御身の往生一定とおぼしめさん人は、佛の御恩をおぼしめさんに御報恩のために御念佛こゝろにいれてまふし、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれとおぼしめすべしとおぼえさふらふ、よく〳〵御案さふらふべし。

《親鸞聖人御消息》

講話

如來の淸淨願心

（求道學舍日曜講話）

近角常觀

今日の題は如來の淸淨願心と出しておきました。深く信心をお喜びの方には、却つて物足りなく思はれるかも知りませんが、今日は秩序をたてゝ諸方面よりお話し致し度いと思ひます。此求道學舍へ來られる方には、多年聞きにきて下された方も隨分多いが、中には新らしい御緣によりて、信仰を求めて居られる方もあります。信仰は、人生色々の徑路を取りて氣附くもの故に、成るべく諸方面より話して、皆さんのお心に能く如來の願心に安心が出來るように仕度いと思ひます。

此頃段々と人に話し、又自分も戴く心持を聞いて頂きたいのは、只今申す如來の淸淨願心といふ事であります。如來の親心に安心させて頂き、此親心にもたれる、それ以外は無いのであります。人生に於て、此處へ氣附かざれば、如何いふ事に於ても、決して自分の立場はないのであります。之を皆さん、よく心に留めて頂きたい。此佛の親心一つであるから、能く味はつて貰い度いのであります。

順序として、如來の御慈悲を喜ぶにしては、事細かしくな

るけれども、皆さんの求道の道行が色々あるから、諸方より能く解かる樣に話しませう。近頃新聞紙上に現はれてあつた事であるが、かの小泉といふ人が行衛不明になつた。原因は唯世の中の事がどうも解からないとの疑に陷いつて、唯もう世間はあり樣にある、働らき度い者は働らき、怠け度い者は怠ける、それでいゝ、死に度いものは死ぬといふ樣に思ふて、哲學的の事から苦悶して、其極どうも死んだらしい。求道學舍へ聞きにきて居られる人には、さういふ疑を抱いている人は、少ないかもしれぬか、多くの人の中にはそういふ方もありませうし、又そういふ不審を承はつた事も有りました。之れは大なる間違てある。我々は道理、理窟て宗敎の事を彼是思ふ、人間は唯自心を本にして、何んにてもはからひを着ける、これは大に注意せねばならぬ。

自分の樣な者が、小理窟をもつてはかるものだから安心が出來ぬ。此佛樣の事や、佛敎の事は、道理、理屈ではありませぬ。佛の廣大な親ある故に、此親心を頂く一つてあります。こういふたゞけては解りますまいが、少し說明風になれど、親の心を頂いた處て、初めて解かるのです。佛は親ぢや、我々罪深き者を可愛いゝと思ひたまふ切な御心を我々に向けて下さる。其親に斯く哀れまれ、斯く憐れみ慈しみの御心を蒙つてるといふ一念に、道理、理窟は、サラリと無くなり、安心させてもらふ。信心を頂かぬ前には、始めの事ではあるが理窟の極はまりが計ひとなり、計らひの極が疑ひとなり、解からん樣になつて、遂には死んでしまふ樣になるから、理窟ては、計つてはならぬ。之は今理窟て世をこねまわす人の事について、其不可い事を言ふたのてあります。

次に此世の日暮しでいふて見ると、前同樣、矢張り、人生を不平に思ひます。何を見ても悲しい、情け無い、何一つ思ふ樣に行かぬと苦悶する。一人々々が勝手に日暮して寄る邊なく、心細いと歎くかと思ふと、又なーにそんなに悲しむ事はない、思ふ樣に世がなれば善いのてあると云ふて、我慢を出して、分以上の重荷をしよいこんて行く。只佛を見とめず、勝手に自分が力んて、世の中を彼れ是れ思ふ。されは、初じめより、我々一人一人の上に廣大なる佛の御慈悲が有りながら、之を戴かず、自分勝手に日暮する。其處て追々心寂しくなり、心細くなり、一人ボッチになるのてあります。世中は皆な四海兄弟て、佛がよき樣に樂しくして置いて下さるに、銘々勝手に此樣に狹めて行くのてある。

何から言ふても皆左樣てあります。後生の一大事に就きても、人世は無常なもの、人間は病氣になつた時寄る邊がない、死後はまあ如何なるかと心配する。之も佛の慈悲が解からぬからてあります。

又進んて云ふて行きますと、此慈悲を喜び居る人自身も、宗敎の將來を思ひて、外界の事に心を惱ましなどするも、つまり親心を忘れて、自分自身要らぬ心配するからてあります。

世の中の總ての惱は、一口にいへは如來の清淨願心の親心を一つ頂かぬからて、これに氣づかずしては、理窟て考へて見ても、修養でやつてみても、何んて遣つて見ても、決して解決する事は出來ませぬ。物質上の事は精神上の事とは違ふと云ふ人もある。けれども、さうては無い。此親に氣就けば

如何なる事と雖も、善くならぬ事はない。さういふと、それはまづい物を甘いといふ樣に思ふ人が有るかもしれませんがそのまづいといふが間違て、始めから甘い物てあつたのてあります。

安心の出來ぬといふは、先にいふ如くに、此慈悲を知らぬからてあります。親鸞聖人の御書物を通して、如來の清淨願心といふが、聖人の信仰の眼目になつて居る。御一代を貫いて我々に聞かせて下された御言葉は、此如來の清淨願心と云ふ事てあります。我々が此南無阿彌陀佛と云ふ事の出來るは、南無阿彌陀佛の親が實に在はしませばこそ、南無阿彌陀佛と稱へさせて貰ふ事が出來るのてあります。其親心のある處て、始めて我々の上に御信心が現はれて下さるのてす。其處て信仰の進んだ處て、餘程氣を附けねばなりません。自分が信ずるのては無い、信ずるとは親の心が屆いた處、モ一ついへば親が居るといふ事ぢや。親が居ると氣づく直ちに信ぢや、手間の懸つた事てはない、今すぐぢや。親は我等一人一人に向ひて、御心を盡して下さる。此親ある上は、此御心を聞くなり實に此の如き親まします、と今まて氣附かざりしが間違ひてあつた。信仰を求むるぢやない、たゞ氣附いた處て、あゝ有り難いと一念發起した處が信てある。聖人は『信卷』に宣はく、

若は信、若は行、一事として如來淸淨願心の廻向成就したまふ處にあらざる事あることなし。

南無阿彌陀佛と氣附かして頂く事の出來るは、親がましませはこそてある。

さて此如來の清淨願心の、清淨といふ事に氣附いて御覽なさい。世中に清淨を求むるに、之に如くものはない。世の中に何がきれい、彼がきれいといへど、何一つ奇麗なものは少しもない。自分が清らかにしたと思ふとも、う穢れて居る。されば眞に清淨と云ふ事は決してありませぬ。私は多くの人の心中を能く聞いて居るが、現今青年の多くにして見れは、自分の心や、行ひや、又人生上いろ〳〵の處に、清淨無垢な事を求めて居られる。そして切に清淨に行はふと懸つて居る。然し實際に氣を附けて見れは、世の中に清淨といふものは一つもなし、此肉體も穢物の寄合ひて清淨ならず、心も否、行も否てある。又人を惡るく思ふといふ事は惡しけれど、又人を絕對に眞實だと信ずる時は間違があります。自他共に眞實清淨ならずてある。青年方は殊に此思想が多い樣てある。一方からいふと、此思想は極眞地目てある故、勉强なさる青年方にはそうて無くてはならぬ、それは實によき事てある。然し是を自他に求むる時は、遂に結局苦しんてしまふ。此清淨眞實は實に如來の御まこと、如來の願心に見出して貰はねはならぬ。

親鸞聖人は、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、皆もつてそらごと、たわごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞ、まことにておはしますとこそ仰せは候ひしか」と仰せられてある。我々人生上に於ては、あゝも斯うもの計らひばかり起す。併しいつも此如來の清淨眞實に氣附かして貰へは、何の事は無い、あゝ此の如き親あるに、己れの小さき〳〵心を以て心配するとは何の事か、と氣附けば

初めて心を翻して安心する事が出來る。此汚れた私の上に、此清淨眞實の如來の御まことを頂くといふ事は、何に例へようや。丁度秋の空の澄み渡つた樣なもの、世の中の心棒と言はふか、秩序がたつたといはふか、實に手丈夫な事が現はれて來るのであります。

皆さんの心に解からぬか知らぬが、も一ついへば、佛の上に清淨眞實を見出さず、自他世の中にのみ求めて居る故失望するのである。世に清淨といふものは佛心の外なし。聖德太子が唯佛眞實、世間虛假と言はれた。此の虛假不實、此罪深き當にならん者を、惠んで下さる清淨眞實のみがまことなのである。是れ大乘の極意である。此世に清淨眞實を見てるうちはごく俗な世間をそう思ふて居るのである。處が彌々其世間が當にならなくなり、左見ても右視ても皆不實だと氣附くと、悲歎にくれて泣いて仕舞はねばならぬ。此世を悲しい、不平であると泣いてるが、其罪深き、泣いてる私を哀れみて、常に我に向ひ給ふ佛ましますぢや無いか、といふのです。

『安心決定鈔』のなかに

念佛の行者名號をきかば、あははや、我往生は成就しにけり、十方衆生往生成就せずは、正覺とらじとちかひたまひし法藏菩薩の果名なるが故に、とおもふべし、また彌陀佛の形像をおがみたてまつらば、あははやわが往生は成就しにけり、十方衆生往生成就せずは、正覺とらじとちかひたまひし法藏菩薩の、成正覺のすがたなるがゆへにとおもふべし云云

信仰を得るとか、得ぬとかいふてくぎりを附けるのでは無いのであります。佛と聞いても無關係になるのがいけませぬ。親と聞けば子があるに決まつて居る。佛と聽けば、此不實な淺ましい世の中に對して、一念一刹那も見捨てず、憐み給ふ親が居て下さるのである。何も人に就いて不平をいふ事はない、自他の不實不淨を悲しむといふのも、つまり佛と親に滿足せずして、他に安心を求むるのである。されば人が自分の氣に入るとか入らぬとか、要らぬ心配せねばならぬ。

どんな偉い人でも賤しい人でも、同じ佛の惠みを信じて初じめて安んずる事を得るのである。決して人の相手に安心する事は、どんな事有つても出來ませぬ。佛の親に出あふ迄は、誰しも理窟で考へるのであるが、それでは何うしても分かりませぬ。今が今佛の親ましまして、我々を惠み給ふ事を感謝せねばならぬ。私にしてみれば、種々宗敎の事を思ひ煩らふ。もつと皆さんを充分に入れる事の出來る會堂を早く建て度いなどゝ色々將來の事を思ふ。然し其時が御慈悲ぢや無い、此些かな室に於て、共に斯ういふ風にして御佛の慈悲を喜ぶ此現今が實に有り難いのである。今を喜ぶのが信仰である。後を想像して喜ぶのは信仰ではない。今が今、此席、此瞬間、佛の慈悲に遇へる嬉しさよ。後々と云うて病氣も直り、困難も修まりて、然して御慈悲を喜ぶのでは無い。今此の樣に寄り合ひ、共に信仰を語る、實に此れ程嬉しい有り難い事は無いのである。我々は念佛唱へて居なから、もつと清淨にならうもつと眞實にせうと思ふ。先づ、佛の惠みを喜ぶ前に、自身が清淨に成らねばならぬ杯と思うて居る。誰れそれは此の如く立派に行つて居る、自分もあの樣に一つやつて見ようと

修養する。之は誠に善き心なれど、自分が清淨になる事が先きではない。自分を見捨てぬ佛の清淨願心を喜ぶ事が先きぢや。廣大なる佛の清淨を仰くのが、第一ぢや。此親ましまして無量壽、無量光、徧く十方の衆生をぢや、一念一刹那も忘れず、惠んで下さる御慈悲である。我々は朝夕の他は忘れて居る、親は忘れぬ。信仰は此佛の親を喜ぶ事である。親に孝行する事ぢやない、既に此親がまします事が信ぢや。ひつぐり返つて居やうが、どうせうが、親は夫れによつて變るものではない、如何なる時といへども、如何なる者に對しても、此の如來の清淨願心が向つて〻下さる、之を深く信ずる事である。世の中に此の佛まします事を忘れなさるな。又現今己れに信無きを悲しんではならぬ。これが見へぬからとて、見やうとするが間違である。見える見えぬに係はらず、佛がましますのである。清淨眞實の願心とは、此不實な不淨な世に向つて憐れんで下さる御心、見捨て給はぬ御心、即ち云ふ迄も無く、彌陀の本願であります。「彌陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし、そのゆゑは、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします、」

たゞ我等煩惱深き者を救ひたまふ御慈悲である。「しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへに、」此如來樣の親に氣づくが本ぢや。「惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへに、」おれは神佛に見捨てられた、もう何の立瀨もない者である、といふて居る人は、自分勝手に自分を見捨てるのである。世の中にどんな者にても見捨てられる人は決してない。佛は親心を私共に廻らして、憐れんで下さる、逃げて行く者をも佛は捨てたまはぬのである。もうこふ云ふ如來の清淨願心が現はれて來た上は、何をか愛へ、何をか不滿に思ふべきである。たゞ此佛の親心が有り難いのである。

今日私が此講話に多少秩序をたてゝお話を致しましたは、秋になつて求道に最も適切なる時節となつたので、種々の人が信仰の事を聞きに來て下さる。たゞ他の事はない、佛といふ親に一つ氣づけば、如何なる境遇に於ても安心が出來る。今如何いふ境遇に居るから安心の出來ないなどいふことは無い、今すぐ安んずることが出來るのである。聖人が敎行信證の總てに於て、行も信も一事として我として得たものはなく、皆阿彌陀如來の廻向成就して下さらぬ事はないと言はれてある。南無阿彌陀佛の名號のある事、其名號の私に屆いた事、清淨の願心が在はしまして私共に廻向して下さるからで、若此廻向が無かつたならば、いつ迄たつても安心といふ事は出來ぬ。話しが二重になるが、此廻向といふことは、『略文類』にかう書いてある。

然るに薄地の凡夫底下の群生、淨信獲叵く、極果證し叵きなり、何を以ての故に、往相の廻向に由らざるか故に、疑網に纏縛せらるゝが故に。

乃し如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣慧の力に由るが故に、清淨眞實の信心を獲れば、是心顚倒せず、此心虛僞ならず。信に知んぬ、無上妙果の成じ難きにはあらず、眞實の淨信實に得ること難し。眞實の淨信を獲れば、大慶喜心を得。

とある。此の如く、他力の廻向によらぬ時は如何しても信心は得られぬ。此親心の切なる往相の廻向によらずして、皆疑網に縛せられて居る。さあ、先程いふ理窟をこねまわしたり、自分の計らひを以て量つて見たり、親に向つて横着いふたりして居るものは皆疑網ぢや。たゞ此如來の加威力を我々に加へて下さるによつて、信心が頂かれるのである。私は此間『信仰の余瀝』の序文を書いてつく〳〵感じました。御慈悲に氣づいてから十一年になるか、何一つも出來ぬ、賢こい心も私は持たぬ、物を洞察する力も無い、又學問があるかといふて學問も無い。されど唯々ありがたい話をして、成程有り難いと戴いてくれた人は隨分多い。未見の同朋未見の同行が居て下さる。是全く如來か威神力を加へて下されずしては、何うしてかく有らうぞ、全く駄目である。私といふ個人を當にして居たら、大失望大落膽ぢや。今朝も勤行の時『御一代聞書』に

「往生は一人一人のしのぎなり、一人一人に佛法を信じて、後生を助かる事なり。

とあつた。ふと私の小供の折、同村に住んで居た一老人の事を思ひ出した。其人は大層御慈悲を喜こんで、寺といふ寺へは悉くお詣り致し、說敎といふ說敎は皆な聽聞して居たが、嘗つて妻なる老婆に御信心を勸めた事がなかつた。それて一日老婆が「お前さんは大層佛法を信じておまゐりなさるが、私にも少し聞かせて下さい」と云つたら、「往生は一人々々のしのぎだ、お前も聞きたかつたら勝手におまゐりして聞かつしやい」といふて、如何しても話して聞かせなかつた。實に其の如く、私等一人一人の爲であつて、決して餘所の事ぢやない。皆んな各々に佛が御力を加へて下さるのである、如何しても此如來の威神力である。どんなに其爺さんが喜こんて居たからとて、爺さんの力で婆さんが御信心を戴かれるものでない。如來が威神力を加へたまふに至りては、信仰を得るとか、人生が如何とか、他の事をみて居る處ぢやない。唯此廣大な御力が有り難いと安心するのである。

斯く安心させて頂けば、つく〳〵と自分の惡しき者だといふことに氣がつく。或人が此んな事を聞いた。歎異鈔に、「善人なほもつて往生すいかに況んや惡人をや」とあるが、其惡人といふは、つまり自稱して惡人といふのであるかと聞かれた。これは大間違である。自分で惡人だと云ふたので惡人ぢやない、自分で惡るいと氣が附くどころか、氣の附かん惡るいだ。それを親の御心が屆いて、始めて自分の惡しきに氣が附いたので、自稱してる惡人ぢやない、ほんとの惡人である。眞に惡しければこそ、佛が憐愍して下さる、加威力によつて願心を加へたまふ。それて、本當に惡人と氣が附くのである。人生に此親まします事は何んたる有り難い事であるか、三世十方を通して無限の慈悲と無限の智慧の塊なる佛の親ましますといふ事は、何たる幸福な事であるか。たゞ此親に氣づくといふ事は此んな容易な事は無い。信心といふも、此親心に氣附く事で、決して求むることては無い。聖人は『歎異鈔』に

彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人が爲なりけり、

と仰せられてある。此親あればこそ、此人生に光あり。始めから此親に氣附かずして、いくら人生の事を數へたてゝ見た

處て、眞實のものは無い。今此席に於て各自佛の懷に抱かれて居る事は、如來の加威力によるが故に、大悲廣慧の力によるが故にである。

入信以來十年の事を思ふと、佛の智慧方便が滿ち〳〵て有る。私は忘れて居ても佛は一刹那も忘れて下さらぬ、常に此の淺ましき身を導びいて下さる。自身思ひなした信心ならば駄目てある。今私が斯くの如く皆さんに話して居る時は、皆さんの心に屹度有り難い心が滿ちてある。私の心も歡喜に滿ちてある。併し此講話が終つてしまふ、暫くすると此心は失せてしまふかも知れぬ。さうして何んとなく、心寂しくなるかも知れぬ。併し皆さんはよく此事を忘れてはならぬ。此處に今了々分明と親は居て下さると云ふことを、心より忘るゝことがあつてはならぬ。自分は忘れた、喜こばれ無くなつたとて、親まて居なくする事が有つては成らぬ。親は我々が忘れて居ても、今の樣に有り難い心に成つて居らずとも、不斷に哀れんて居て下さる事は事實である。私は此講話をしたり、皆さんと信仰を談る時は實に嬉しい。それで人々はいつも其樣にニコ〳〵して居るかと問はれる。けれども私は何時でも此樣に喜こんては居らぬ。現に此間も第三求道會の例日毎月二日にするのを、此度すつかり忘れて仕舞つた、實に人にも恥かしくて話せない樣な事である。求道會は實に私の生命である、實に樂しみにして、此日の來るを待つて居るのである。地方傳道から歸つて來た時も此次の二日の會を非常に待つて居たのである。然るに何ぞや、全く其當日になつて忘れて仕舞ひ、夜の勤行の時に至るまで氣がつかなんだ、實に仕方のない人間である。それ故惡るくあつても善いぢや無い、實に其晩は大地を叩いて殘念がつた。或御經に寒林に餓鬼が自分の前世の惡業を悔いて、前世の骨を叩いて居り、天人は自分の前世の墓に香華を手向けるといふ事があるが、實に私は斯の如く餓鬼根性を起して、自分の身を鞭撻して悔ゆるとも駄目である。たゞ我々の上に廣大なる親の有る事を忘れてはならぬ。斯く歎こんて居ながら、常に惡しき勿體なき心を起しては身をうつ樣な事をするけれども、佛は此我を憐れんで下さる事を忘れてはならぬ。自分に有り難い心が無くなると、共に親まで無くなると思ふてはならぬ。都合によると私自身が此樣な勿體ない事を氣附かずにする。さうぢやから自分は間違つても、間違つて下さらぬ親樣がある事が有り難い。今後は眞に此樣な事は爲まいと懺悔さして頂けるのである。

時には餓鬼の骨を叩く樣に、現今の身を叩いて悲しむ。其樣な心根の賴みなき者を救けて下さる親樣の御惠みてある。自分でも自分に呆れてしまふ樣な者を佛は捨てゝ下さらぬ。此捨てぬと云ふ事を徒に聞いてはならぬ、親の思ひは子が親を思ふに並べ物にならぬ。餘りくど〳〵しいが、信仰とは物の解かつた事でも、悟つた事でも無い、此佛に氣附いた事である。

肋けんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ

と親鸞聖人が喜ばれたのは、

御身にひきかけて、我らのまよへるをおもひしらせんがためにて候ひけり

と、我々知らぬ者に迷つて居る事を氣附かせて下されたので

ある。自身親を知らずして、人生が思ふ樣に成らぬ等と云ふは間違である。「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」とまで安心が出來れば、何んな事でも辛抱が出來る。危い、落ちさうな處をも、親の力で落ちずして安々と行く事が出來るのである。經には護持養育とある、實にさうで、自分の力で落ちないのだと思ふたら大間違である。危なくない處と思ふたら大間違である。此の如き力なき者が危險な處を安々と通れるは、皆佛の御手引あるからである。佛は不斷に我等をはぐくみ、育てゝ下さる、これが護持養育ぢや。信心といふたら此如來淸淨の願心の屆いた處ぢや。又親の心の變り給はぬ限りは親の有り難いと云ふ事は消えぬ。かくして經にのたまふ如く、大慶喜心を頂いて諸の聖尊の重愛を得るのである。他の世間の事は相對の喜なれど、此信心は絶對の慶喜の心であつて、此上もない、佛の恩寵を蒙る事である。其樣は

智慧妙達にして、功德辨際なし、

といふ有り樣である。信仰と云ふは一時唯づッと喜ばしいと云ふ斗りぢやない。世の闇がからりと明けて仕舞ふて、智慧妙達で、迷がすつぱりと晴れて仕舞ふのである。所謂

大威神功德の人、又廣大勝解の者

である。俗な言葉で云へば、大なるすつかりと解かつた人、といふ事である。佛の御慈悲に氣附いた人は富貴、貧賤を問はず、慈光中に住んで聖尊の重愛を受けてる此上もない、幸福無上な人である。人中の分陀利華である。

此の如く、他力の信は一方には自分が實に誇るべき有り難い事、又一面には此上もなく懺悔する事である。或人が御信心を戴いたとて、大層自分が、えらい者になつた樣に書いて寄越した、是れは實に氣附けねばならぬ事である。かく思ふたら實に勿體ない事である。たゞ信心を頂いて、ヤツトあたり前になつたのである。信心といふ事は平凡も平凡も普通の者の列に加はつた事である。聖人は和讃の卷末に宣はく

よしあしの文字をもしらぬ人はみな、
まことのこころなりけるを、

善惡の字しりがほは、
大ぞらごとの形なり、

罪の深い奴が罪の深いと氣附かして戴いたので、漸く當り前になられたので、この當り前にさせて貰ふた事は實に有り難い事である。人生此處に至りて如何いふ樂と云はふか、喜と云はふか、實に間違だらけの奴が、漸く一人前に氣附かして頂いたのは佛の御力である。

現今日常の生活に困らぬ人、普通に暮してる人々は、佛の御慈悲を喜ばして貰ふ上に於て、身に少しの障りはないが、病氣だとか、貧賤で其日暮が立たぬとかいふ人は、御慈悲を嘉ばふと思うても喜ばれぬと思ふかもしれぬ。是は亦大間違である。病氣や貧賤や苦痛にありて、又世の中百般の苦勞のうちに在りて喜ぶ信心こそ、眞の信仰である。又前にもいふ如く、大威神功德とあれば、丁度枯木に花の咲く樣な事が、信の上には來るのである。親を忘れた時は自分で自分を見捨てた時ぢや。左樣云ふ境界に於ても、親は決して見捨て給はぬ故、何卒親の在す事を喜びませう。

先程云ふ如く、若は行、若は信、又若は因、若は果、又若

は往、若は還、一事として如來淸淨願心の廻向成就したまふ所に非ることあることなし

皆佛の惠みを喜ぶ事も、往生する事も、唯如來の淸淨願心の御廻向である。聖人が『略文類』に、至心信樂欲生の事をお書きなされて、次に二河白道の例を出し給ひ、

衆生貪瞋煩惱中、能生淸淨願往生心也、

とある。我々が淸淨にして其處で御信心を戴くぢやない、貪瞋煩惱の中に此おまことを頂くのである。苦しんでる處へ戴く信心ぢや、不實不淸淨の者へ頂くのである。

先達てもと此學舍に居られた佐伯といふ人が、草津の方へ行つて居られたが、歸て來られての話しに、彼の近傍には隨分氣の毒な癩病患者が集つて一村を形づくて居る。其中にも特志な人が寄り集つて、共に求道會の樣なものを作り、折々一所に集つて御信心の事を談る會合があるさうである。其處では誰が話しを特にすると云ふでなく、御聖敎だの求道だの、雜誌類等の有り難い事を變る〳〵輪讀して喜ぶので、或は眼のみえぬ人、又眼がみえても字の讀めぬ人等は、讀んで聞かせて貰ふて喜ぶと云ふ風である、との事であつた。私は其話を聞いて實に嬉しく有り難く思うた。此の如き人の喜こんで呉れる宗敎こそ、人生最終の宗敎である。先年熊本の回春病院を見舞ひましたが、今回石見て其處の牧師をして居られる方に御目に懸り種々話を聞きましたが、實に癩病患者ほど氣の毒な者は無い、全く此世から見捨てられてある。「私共は人に親切を盡さうと思へば盡せるけれども、此等の人は例へ出來た處で神と共に働く舞臺がない」と申された。若し、布施持戒忍辱等の行をもつて安心する宗敎ならば、これらの人は到底安心する事は出來ぬ。然るに此の有り難い佛の親に救はれて、此世をば全く安々と打捨てられて、たゞ佛の親の御慈悲一つに喜こんで居るとは、實に何たる有り難い事であらう。是れぞ眞實の信心、佛の重愛を蒙れる人である。例へ身に錦鏞を纏ふと雖、此佛の御慈悲を喜べる癩病患者の幸福には及ばぬ。此等の人々は此世の總てと絶ち、此世の親兄弟、同朋と相まみゆる事が出來ずとも、如來の親がついてゝ下さる。私はかゝる草津の山奥に、此樣な有り難い會合の有る事は實に企てんとして企つべからず、全く佛の加威力と感謝する次第である。佛の御慈悲は境遇の如何によらず、一味平等に喜ばして戴けるのである。十方の衆生を救はずんは正覺を取らじとある其十方の衆生が此如來の淸淨願心によりて、悉く何時と云はず今此處で佛の御慈悲を喜ばして戴く次第である。

一、慈悲に聖道淨土のかはりめあり、聖道の慈悲といふは、ものをあはれみかなしみはぐゝむなり、しかれどもおもふがごとくたすけとぐることきはめてありがたし、また淨土の慈悲といふは念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもておもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり、今生にいかにいとをしく不便とおもふとも存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし、しかれば念佛まうすのみぞすゑとをりたる大慈悲心にてさふらふべきと云云

《歎異鈔》

雜錄

實驗の信仰に就いて

近角常觀

私の信仰の實驗に就いて、其意見を告白せよと、東亞の光の主筆より御話ありましたに就いて、自分としては既に十年以前のことであつて、今更珍しきことにもあらざれば、特に申上ぐるも事々しく感じますれども、御指圖のまに〳〵自分の實驗を始めとして、幷に平素自分の同信の人々の實驗に於て目擊せる事實、幷に此實驗の信仰より出るところの哲學及び道德に關する卑見の一端を披瀝して見やうと思ひます。

（一）內的實驗　宗敎は其根本を內的の實驗に置かなければならぬと思ふ、此事は素より當然のことにして、改めて言ふべき程のことにはあらざるも、近頃宗敎を論ずる多くの人が、哲學的考察より來たる世界原理を主として宗敎を論ずる傾向ある故に、特に自分は此實驗と云ふ點に、力を强めて言ふ次第である、殊に佛敎の如きは、釋尊の傳記夫れ自身が、人生に對する生老病死の實際の苦痛より解脫して、降魔成道の大光明に達せられたる實驗の外なきのである、此境涯を稱して佛陀即ち覺者と稱する次第である、此點を中心として、此佛陀の實驗を追ふて其境涯に入ることを說かれた者が一切の佛敎である、故に其宗派の上には種々の差別を生ずべけれど、結局此大自覺の實驗の光に觸るゝと云ふことが主眼である、そこて如何にして此光を實驗すべきか、自分自身が佛陀夫れ自身と同樣に自ら之を自覺すべきか、又其自覺せる佛陀の光に依つて攝取さるゝか、又佛陀夫れ自身と同樣に、吾々も現世に其境に達し得るか、又吾々は其一部分を認めて、遂に身終るの後に此處に達するか、是等の點に就ては其實驗の模樣に依つていろ〳〵と變りあるべけれど、何れにしても我等が佛陀の光夫れ自身に接觸し、之れを內心に實驗すると云ふ一念あるにあらずんば、決して宗敎の天地を開き來つたと云ふことが出來ぬ、そこて先づ順序として私自身が實驗したる有樣を一應申さねばならぬ。

私自身の實驗は、小著「懺悔錄」及び「信仰の餘瀝」の中に、內心の有樣を描いて置きまして、既に數年以前に世上に告白して、世の人生問題に苦しむ人の爲めの參考に供して居る次第であれば、詳しき心の有樣は其書に讓つて、今は寧ろ之れを側面より描して見やうと思ふ。

其事は明治三十年のことにして、一應其以前に於て自分の考へて居つた心中を描いて見やうならば、先づ世界原理に就いては、今日一般の人が思うて居る如く、世界の本體は眞如であると考へ、尙又之れを人格的に寫象して佛陀と考へ、此原理を研究し、此佛陀に對して歸依の情を催し、且此佛陀の指導の下に人生日常の行爲を爲すと云ふ心持であつた、そこて其當時は是れて十分自分の信念が成立した積りてあつたところが、後に至つて單に智力としては思索假定に過ぎず、情としては强いて自ら起したる情操に止まり、意思としては所謂

律法的に自策勵行したに過ぎないことを悟つたのである、扨如何にして此點に氣付き來つたかと云へば、即ち人生問題、活きたる人生の苦しみに出逢つたときに、從來の總ての物に皆破綻を來したのである、其有樣を概括して一言すれば、自分は上に申せし如き佛を信ずる立場より、宗敎及び道德上の諸の格言を實行せんと心掛けて居つたのである、殊に自分の假定、及び敎育の指圖に從つて、人に對して憎みの考を有つと云ふことを止めねばならぬと云ふことが、最も衷心の思想であつた、即ち「身を殺して仁を爲す」とか「怨は怨を以て止むべからず」とか、又「敵を愛せよ」とか言へるが如きことは、即ち其根本思想である、然るは平素は自分も之れを行ひつゝある積りであり、又如何なる場合にも之れを行はねばならぬ、又行ひ得るものと確信をして居つたのである、夫故何時の間にやら自分は最も正しきもの、自分は最も人の爲に犧牲となり得るもの、又佛陀の意に適へるものとして考へつゝあつたのである、是れ後より氣が付けば、即ち假定的信仰より起る自己の價値を知らざる最も傲慢なる態度である、是れが今日一般信仰を唱へられて居るところの人が、未だ絕對の光を見ざるときに、必ず陷る誤謬にして、又是れが爲めに大いに苦しむべき運命を有して居る點である、啻に信仰を唱へつゝある人のみならず、苟くも眞面目にして道を辿りゝ理想を求めむとするが如き青年が、却て大いに人生を悲觀し、又自分の欲する理想的の人生を實現し得ずと云ふて、煩悶に陷るも元とは此點が病根である。

そこて先づ自分の經驗に歸りて御話をすれば、自分が斯の如く完全なものであると考へつゝある故に、外界を見ても總て自分の理想に反するもののみにして滿足にない、されど敵を寬容し敵を憎まざるが信仰の眼目なりと考へて、强いて自ら抑制して我を殺して行く、即ち若し佛敎の無我と云ふことを斯の如き意義に解するならば、無我と云へることは消極退嬰の律法主義に過ぎないのてある、さりながら斯の如きは宗敎の本旨てはない、されど當時にそれを所謂無我なることゝして、最上の道德の如く考へつゝあつたのてある、斯の如き心の狀態は必ず一度は大破裂を來たすべき運命を有つて居るのてある、果して自分は宗敎界の腐敗と云ふやうな問題に就いて慷慨するの餘り、先輩の後へに從つて身命を顧みず大いに盡力をすると云ふやうなことになつたのてある、之れを世間的道德の見解より云へば、或は善き行ひてあるかも知れぬが、未だ光を認めずして自分を絕對に善い者のやうに考へて、直ちに他に向ふと云ふことは抑も誤りてあつたのてある、果して宗敎界を改革せんとして感奮したる自分の心は、自己內心の價値を現はし來つて一大煩悶を來たした、而して却て自己の內心上に、一大改革を來たしたるのてある、其心の狀態は如何と云へば、先づ自分が其事業の爲に心身を過勞したる結果遂に自分の內心に從來曾て經驗せざる考を生じ來つたのてある、幷は何かと云へば、自分は斯くまて正しきことの爲に、又公なることの爲に犧牲となりつゝあるに、他人は各々自己のことを主として、其利益の爲に働くと云ふことは、實に不思議なる世の有樣てある、實に强食弱肉の我利我欲の世界の有樣てあると、初めて眼光を他人の上に轉じて他を疑ひ、世界

を憎み、社會と離隔したる感を生じ來つたのである、一度此感を生じたる以上は、益々其心が甚しくなつて、人生一點の光をも認むることが出來なくなつたのである、所謂千里の堤防も蟻の一穴より土崩瓦解したるが如く、多年築上げたる信仰は、此一點の懐疑を本として、人生悉くを暗黒ならしめたのである、是に至つて嘗て佛陀の命令の下に行ひ得べしと考へて居つた敵を愛するとか、身を殺して仁を爲すとか、恩を以て怨に報ゆなどとか、他の爲に犠牲になるとか云ふやうなことは、皆悉く駄目になつてしまつたのである、隨つて今まで歸依の情を起しつゝあつた佛陀も、何時の間にやら消去つたのである、眞如と云ふも世界の本體と云ふも、此苦しみの人生には何等の意義をも持來さぬことになつたのである、是に於て殆ど一身の置所もなく、所謂無明の世界に彷徨ふたのである、當時自分の中心に、古來の宗教家は何れも大煩悶を經て大安心をせられたのである、殊に其當時聽講しつゝあつた釋尊傳にあるところの有樣が、今や將に自分の身の上に來つたのであるとの考は動かなかつたのである、然れども唯益々暗黒より暗黒に入り、深きより深きに墮つるのみにして、一點の光明を見出すことが出來ない、其苦しみの狀況の如きは前に記したる「懺悔錄」を一讀せられんことを望む、其時漠然と自分の心に考へつゝあつた思想を云へば、我れ他に對して、如何なる惡しきものに向つても善くすることが出來ると考へつゝあつたが、全く誤りであつた、我れと他人との關係は五分々々である、他人が我れを五分疑へば、我れ又之れを五分疑ふ、我れ彼れを一寸疑へば、人亦一寸疑ふ、斯の如く互ひに相感應するが人心である、而して我れ既に惡しきものに善き感化を及ぼすこと能はず、人亦我が惡しきに對して、善き心を以て善き感化を與ふること能はずんば、世は互に惡しき感化を以て、一歩々々暗黒に墮落するものであると云ふ感じであつた、此間に於て唯溟々の間に自分の切に求むる心持は斯の如き惡しき自己に對し、斯の如き惡しき人生の中に、此惡しきものに向つて、善き心を以て報ひ、惡ければ惡しきだけ益々善き心を以て向ふ人なきや、尙ほ言換へれは　我れは人生に對し、他人に對し、此根本的疑惑を解く能はず、此疑を止めれは人生も他人も必す善くなるものには違ひないと知つては居れど、其疑を止むる能はす、若し人生に我れが斯の如く人生を疑ひ、他人に對して苦しみつゝある其心情を察して、如何にも無理なき苦しみにして、尤もなることであるとして、之れを酌取我が疑に對して疑を以て報ひす、尙ほ其疑ふものを信じて、同情を注ぐ人もなきやと言へるが如き感を有ちつゝあつた、然れども是れ所謂仰望希求の念にして、其心頗る切なるものあるも、未だ何等の光をも見出すことが出來なかつた、然るに遂に自己は心のみならず、肉體に於ても病を得、其苦しみ極つて後病は漸く癒へ、其年の九月十七日頃より自然に內心に於て漸次光明を認め來つて、今まで豆粒の如く小さなる心が、自から大いに開け來つて、初めて言ふべからざる光を內心に實驗し來つた、其實驗したる心の味を強いて言葉を以て言現はしたならは、ア、我れ久しく佛陀の惠を知らざりき、佛陀とは實に斯の如く疑へる、斯の如く苦しめる、斯の如く惡き我れに對して、眞の同情、眞の慈悲を

以て迎ふ友、寧ろ親であると云ふことが明かに信ずることが出來るやうになつたのである、此處て一言して置きたいことは、前年綱島氏の見神の實驗を唱へられたときに、自分は自己の經驗より照して、同氏に對して幾分の同情を表した次第である、其時に自分の經驗を同氏の經驗と並べて、見佛の實驗と云ふことを申された人もあつた、若し此見と云ふ意味を、所謂心眼に於て見ると云ふ意味であつたならば、決して拒むべきことではないのである、其時は佛と云へばとて、決して或一種の形ある肉眼に映ずべき佛と云ふ意味ではないのであつて、一言にして云へば佛とは大慈悲是れなりとでも言はなければならぬ、何れにせよ此實驗の有樣といふものは、勿論理屈道理を以て言ふことの出來ざるのみならず、言語文字を以て形容することの出來るものではない、そこで古來光を見るとか、聲を聽くとか、冷暖自知するとか云へる如き五感直接の言葉を借り來つて、此實驗を表白することになつて居るのである、以上は私自身の實驗の概略を側面的に寫して告白したのである。

(二)信仰の對象　此內的實驗なる信仰の事實は、頗る絶對的なるものにして、此一瞬間に依つて吾々相對の人間が、絶對の偉大なる或物を認めたのである、動もすれば世人は以上叙述したる如き信仰をば、情的の信仰と評する人もある、併し決して情的と云ふ感情一片と云ふ樣な狹いものではないのである、世人は智的と云へば、哲學的に考察すること、情的と云へば、渴仰歸依の念を生ずることゝ考へつゝあるもの故に、此二者を別けて論ずることをするが、是れは絶對の上より來たる智情にあらずして、詰り人間的の理屈と感情に過ぎぬのである、今申す實驗の如きは、斯の如きものを超絶して絶對なる光に接した狀況である、故に茲に世界人生に對して、一點疑ふことの出來ない明かなる謂はゞ直覺的の歸依を生ずるのである、佛敎の言葉で言へば、所謂無分別を生ずるのである、同時に勿論其絶對の大慈悲に接し、光明に攝取せられて即ち歡喜の絶對の喜悅の情を生ずるのである、そこで此實驗に依つて初めて私の心に認められたる信仰の對象、即ち佛陀夫れ自身の如何なるものであるかを話さねばならぬ。

前にも申したるが如く、其實驗以前は世界原理の上より佛陀を考へ、而も其世界原理を眞如と名付けたるものと考へつゝあつたのである、隨つて之れを佛陀と名付くると云ふことは、强いて人格的に寫象したばかりであつて、所謂擬人的なる抽象的なる假定としての佛陀に過ぎなかつたのである、然るに此實驗以後は、此考の誤つてありしと云ふことが全く明瞭になつたのである、佛陀は決して擬人的のものにはあらず又抽象的に假設したものにあらずして、明かに吾々罪惡なる者に對して、大慈悲の心を以て迎へ、我れを救濟するの親たることが、其親の惠みに接して初めて解つたのである、此處に一言すべきことは、此佛陀は決して實驗以前に理論的に建設して、而して信ずると云ふ順序にあらずして、吾々が實驗即ち信仰に依つて、初めて認め得べきものである、そこて佛敎に言ふところの眞如と云ふことは、世界の本體と云ふことが主にあらずして、寧ろ佛陀夫れ自身の廓然明朗たる境涯である、勿論印度は非常に哲學思索の盛んなる國であるが故に

此佛陀の境を哲學的に說明するに至つては、勿論後に世界原理にまで關係して說いたことは明かである、さりながら根本として忘れてはならぬことは、決して哲學的世界原理の說明を根底として佛敎を築上げたと云ふものではないのである、此點に就いては、私は從來佛敎者の說明に少からず滿足を表することが出來ぬものである、例せば大乘起信論を解釋するにも、現今の佛敎者は眞如と云へば直ちに世界の本體なりと考へ、無明と云へば世界差別現象の原理なりと考へて、世界說明として平等差別を說くに止まり、其眞如と云ひ無明なることが、佛敎の大問題たる迷悟染淨を根本として起れりと云ふことを殆ど忘れたるものゝ如くである、極端に云へば、西洋の哲學者が、世界の本體現象の說明を爲し、世界本體論及び認識論の說明をしつゝあると全く同樣に考へて、此自覺實驗の大なる信仰を說きつゝあると云ふことを忘れたるものゝ如くである、成程起信論に於ては、世界本體論も認識論も大いに用ゐてあることは事實明かであるが、さりながら其根本義は其題目に於て示さるゝ如く大乘に對して信仰を起すの論である、尙ほ適切に云へば、起信論に於て最も肝腎なのは、覺と云へる問題である、其覺とは即ち此論の初めに言へる佛陀が降魔成道の實驗を以て得られたる佛陀の境である、而して眞如とは、其佛陀の境の無始無終なる平等絕對の有樣にして本覺と云ふものである、而して無明とは、人をして其本覺の境に背かしむる忽然念起の根本の煩惱である、故に之れ不覺と名付くるのである、成程世界論から云へば、單に本體現象のことのやうに言ひなせど、佛敎の本意は其點にあらずして、此不覺の境涯を去つて、其本覺の光を見出す實驗夫れ自身を說くのである、自覺即ち是れである、隨つて此覺者即ち佛陀の境涯には、法報應の三身を生じ來たる次第である、世人が法身と云へば、直ちに宇宙の本體のことゝのみ考へ、報身と云へば何か形ある人間のやうに考へて、殆ど此二者の間に連絡を見出し得ないのである、之れは大いなる誤である、法身と云へば無明の暗雲れ、三毒の煩惱消えたる本覺明朗、絕對の佛の境界である、此境界は決して苦しめる、無明に迷へる、三毒に醉へる、人生に對して、冷然として看過し得べきやうなものではない、若し斯の如きことが爲し得られるものならば、眞の本覺にあらず、此暗なき煩惱なき境涯より、暗黑の世界を眺むれば、大慈悲大光明が起らざるを得ぬのである、此慈悲大光明が即ち報身である、即ち法性法身より、方便法身を生ずると云ふのは此趣である、而して斯の如き覺者夫れ自身が、人生歷史の上に於て現はれたのが大聖釋尊の應身である、然るに哲學者の立脚地より云へば、此實驗に依つて此佛を認めると云ふことを爲さざるが故に、私が說くが如き大慈悲大光明の佛陀を信仰の對象として認むることが出來ぬのである、是れ世界說明を主とする哲學者としては、無理ならぬことなれども、信仰の實驗を說くべき佛敎者自身が之に雷同して、眞如を以て世界の本體原理なりと斷定し、却て宗敎の本體、信仰の對象たる佛陀を擬人抽象假定的に過ぎずと考ふるに至つたは、頗る遺憾なる次第である。

(三)人生の實行　此內的の實驗は絕對的なるものであるが故に、又人生生活の日常行爲の上に大いなる力を與ふるもの

である、世人は將來の宗敎は道德的ならざるべからずとか、或は實行的ならざるべからずといふ如きは頗る不適切な言葉である、即ち信仰が智的であり、若くは情的であると云ふ如く、別々に言ふことが出來るならば、或は意思的ならざるべからずと云ふことも言ひ得るが、斯の如きは絕對なる信より來たる實行にあらずして、予が前に言へる律法的行爲より來たる意思の宗敎のことである、絕對の信仰は必ず又絕對的に意思の活動を起し來たるものである、詳に言へば、內的の實驗に依て、信仰の對象として絕對の慈悲者たる佛陀を認むると同時に、又我れ自身の價値と、其佛陀に對する關係を見出すことが出來るのである、即ち絕對の大慈悲の佛陀を見ると同時に、我自身は絕對罪惡の塊にして、又今までの人生は全く相對差別の間に相爭ひつゝあつた罪惡の人生でありしことを懺悔するの念慮が勃然として起るのである、而して其罪惡なる我が、彼の絕對の慈悲の爲に救はれて、其の惠みの親の子となれることを自覺するに至るのである、是に於て初めて吾々一個人なるものは、個人としての存在にあらずして、彼の絕大者の子として子たることを自覺するのである、即ち人生に於て人格を完成すると云ふことを言ひ得るならば、即ち此自覺を生じたるときである、そこて其自覺を生じたることに依て、人生に對する吾々實行の上に如何なる變化を來たすかと云へば、第一番に言ふべきことは、他人に對する無抵抗的心情を實現することがある、無抵抗的心情と云ふことは、如何なることを意味するかと云ふならば、從來は善にせよ、惡にせよ、總ての行爲が皆對他的に起つたのである、前にも言へるが如く、縱令敵を愛し、怨に報ゆるに德を以てすと雖も、其の心持は、彼れは我れの敵である、彼れは我れに斯の如き惡しき事を爲したものである、されど我れは其敵を怨まぬやうに行はなければならぬ、此怨に對して斯の如き善き行ひを以て我れは實行するのであると、云ふ根本になつてある、縱令善を爲すと雖も、矢張一種の抵抗的思想を以て善を爲すのである、況んや勿論惡に報ゆるに惡を以てし、怨に報ゆるに怨を以てするが如きは、所謂眼を以て眼を償ひ、齒を以て齒を償ふ所にして、皆相對的の行爲である、前にも申述べた我が實驗以前に努めつゝあつた態度である、此態度にすれば、縱令初めは自分は善き者のやうに考へつゝあつても、結局五分々々の行爲たるを免れざるやうになる、全體倫理を說き、又信仰を說く人と雖も、此實驗を經ざる以上は、どうしても皆此相對的抵抗的善を奬勵するに止まるのである、是れ即ち宗敎上で言ふところの律法道德である、律法道德である以上は、どうしても衷心に悅服して自動的道德と云ふことはあり得ぬのである、世人動もすれば忠孝に對して疑を挾む所以のものは、若し忠孝を此自動的道德の上より說けば宜きも、斯く律法的に說くが故に、動もすれば反動を起し來るのである、近時多くの人の唱ふる修養、若くは求道と云ふ文字の如きも、多くは此律法主義に陷り易き虞がある、釋尊が婆羅門敎を棄てたるも、法然上人、親鸞上人が戒律を棄てたるも、此律法的行爲を棄てたのである、然らば此內的實驗に依つて如何なる變化を來たすかと云ふに、人生上他人の如何に依つて他人に對する思想は打破れて、唯佛陀と我のみを眺むるやうになる

のである、尙ほ詳しく言へば、眞に大慈悲なる心に依つて我が攝取せらるゝと同時に、我又彼の大慈悲に融和して、所謂無碍の境涯になるのである、無碍と云ふは即ち眞に無抵抗的狀態である。

そこで一つ注意すべきことは、トルストイが說く所の所謂無抵抗的である、私の考では、トルストイは確に此內的實驗を經て、所謂無抵抗的行爲を人生に唱導しつゝあるものであると思ふ、さりながら自分がトルストイに飽き足らざる點は、トルストイは自分が經驗したる此內的實驗を人にせよと云ふことを餘り說かずして、單に人に對して人生に無抵抗的に行へよと奬むるのである、即ち人右の頰を打たば左の頰を打たしめよ、若しそれ上着を取れば、其下着をも與へよと云ふことを說きつゝあるのである、されど是れ頗る無理なる注文にして先づ此行爲の出來るには、各人がトルストイ同樣の內的實驗を經たる以上にあらずんば爲し得られぬことである、强いて之れを爲さむとすれば、前に私が陷つたる如く律法的に此意味を解釋して、遂に苦しみに陷らざるを得ぬのである、現今日本に於てトルストイ主義を奉ずる人に於て、確に其點を認むることが出來るのである、又嘗て行はれた『無我の愛』の如きは確に一種の內的實驗を經て之れを唱導したるものであつて、自分は之に對して幾分の同情を表した次第である、さりながら一つ彼の『無我の愛』にも、トルストイより來たる誤謬を踏襲して居る所がある、それは何かと云へば、人生に對する行爲は唯自分を棄て人に與へよ、言換へれば自己を全く消極的に殺してしまうて、人に與へねばならぬと云ふ一種の律法を生じて居る、全體無抵抗と云ふことは、必しも遁げ、必しも與へよと云ふ意味ではない、進むにせよ退くにせよ、取るにせよ與へよと云ふ意味ではない、自分が或慾心を以て、若くは或我執を以て抵抗的に行ふなと云ふ意味であつて、極端に言ふならば、眞に無我無心に我利我執を離れたならば、或は進んで取るも可なり、惡しきを覺醒せしむるも決して不可とは爲さぬのである、併し是れは人をして我利我執の心に無我無心の裝飾を爲して、自ら欺き又人を欺くの誤に陷り易き點なるが故に、大いに注意すべき點ではある、さりながら眞に無抵抗の狀態であれば、進退與奪必しも不可とはせぬのである、斯くなつてこそ、人間が或一種の信念を以て進退をすると云ふことが人生の行爲の上に現はれるのである、即ち天下擧つて我れに與ふるも、我れ取るべからざるときは決して之れを取らず、天下擧つて我れを退くるも、我れ佛の惠の下に進むべきときには、進まざるを得ずと云へる行爲を生じ來たるのである、是れ對他的行爲にあらずして、他人に對して眞に無抵抗なる、言換へれば何等の恩怨の感を有たずして、自分の爲すべきことを爲すと云ふになるのである、吾人が此の狀態に到り得る所以のものは、畢竟佛陀の我れに對する無抵抗的行爲、即ち救濟の爲に無抵抗にせられたる有樣である、斯く言へは甚だ立派なる人間、完全無缺の人間になつたことのやうなれども、唯其自覺の點を强めて言ふたのみであつて、要するに我れは罪深きものなりと云ふ懺悔心と、此罪惡の我れを惠む佛の慈悲を感謝するの情の外はなのである、此の實驗に入ることは如何なる人間でも爲し得られるのである、佛

敎に於て一切衆生悉く佛性ありと云ふは之れを意味するのである、縱令如何なる犯罪者と雖も、亦一旦死刑の宣告を受けたる囚人と雖も、時來つて此實驗に入れば、殆ど人格を改造し、又其犯罪性を破壞して無抵抗の人間となるのである、例へば護謨球を外部より壓するときは、其壓力の減ずるに從つて舊に復するが如きは、律法的道德を以て自ら努めつゝある心の狀態である、若し一度其護謨球を破り去つて其空氣を出し去つたときは、再び其罪惡の行爲を爲す彈力性を失つてしまうのである、即眞に懺悔をした人は、眞に再生したる人と看做して宜いのである、此點よりして私は死刑宣告後に於て、此意味に於て全然開悟したるもの、即ち自ら其罪狀に服して首を伸べて其死に對して無抵抗の心情にまで出たる者は、特に之に特赦を與ふることは、至當のことであつて、又必ず人格を尊重する上に於て、爲さなければならぬことゝ信ずる次第である、此事に就きては他日又識者の敎を仰ぎたいと思ふのであります。

以上は御懇切なる御需めに應じて、自分の所信の儘を無秩序に披瀝した次第であります、自分の所信を極言するの餘り、大方に對して禮を失したる點あらば、之れを宥恕せられんことを望みます。

一心不亂　行誠上人

一すぢに心かけずはさゝかにの蜘のいがきもかゝらざらまし

雪山童子

身をすて、一雪のみ山のゆきよりも深きは法のさとりなるらむ

講義

他力信仰の淵源

近角常觀

二　念佛と信仰

佛敎全體を念佛の一つに結歸する事は、前章に於て大略話しました。去りながら猶ほ意味を明了ならしむる爲に、念佛の佛に就いて、佛身論の大略を一言致しまする。

抑佛成道の時三歸の成立するや、南無佛の一念佛は結局一代佛敎の根源と謂つ可きであります。此の時の佛とは、人生の上に肉身を持つて應現し給ひたる大聖釋尊の事で、即ち應身であります。去れど佛は單に八十年の釋尊丈けでは宗敎としての根底を得る事が出來ませぬ。故に此の肉身の釋尊が悟り給ひし絕對の境界夫れ自身は、釋尊の悟り給ふ前も、入滅し給ふ後も變はる所なき境界であります。之を名づけて法身と申します。此の法身と釋尊夫自身との關係を一代經の上に於て跡づくるに、先づ初め『華嚴經』は釋尊成道後三七日の間

樹下石上に於て自己の悟り給へる所謂本覺の境界を靜觀し給へる佛陀夫れ自身の境界、即ち毘盧舍那佛の說法であります。之を前章に述べたる人生の實驗としての佛陀、即ち應身の釋尊の側より見れば、生老病死の人生問題を解決し、十二因緣を內觀し給ひつゝある時である。十二因緣は釋尊が無明を滅して、涅槃を證り給ひたる人生的經過である。其の涅槃夫れ自身の佛自悟樂の境界が、即ち『華嚴經』である。又一代經の終り『涅槃經』に於て之を言へば、佛跋提河の邊に於て、將に涅槃に入り給はんとする時、阿難泣いて如來に訴ふるには、「如來滅を示し給ふ事何ぞ速かなる、願はくば我等が爲に止まり給へ」と願ひたれば、佛即ち答へたまはく「如來の色身は滅すと雖も、法身は滅びず、如來は常住にして變易ある事なしと、是れ應身の釋尊は滅し給ふとも、法身の如來は現に我等の前に止まり給ふのである。故に佛敎全體を南無佛の一に歸結する時は、初の『華嚴經』より、終り『涅槃經』に至る迄、貫徹する本覺明朗の法身佛を念ずる意味となる事は、明らかである。

さて斯の如く法身佛の境界を明らかに論じたるに就いて、注意すべき點を忘れてはならぬ。そは外ては無い。今日青年諸君が佛敎を解するに、此の法身といふ事を單に哲學的解釋を以て、宇宙の本體とのみ考へ、佛陀夫れ自身の悟りの境界であるといふ事を、全く取り徐けて居るやうである。故に法身と佛とが緣遠くなりてある。佛境界を離れて法身の成り立つ筈は無い。併し法身は全く佛陀の本覺夫れ自身の境界であつて、醉ひ無く夢なき非古非今無始無終の醒めたる境界である。其の境界より斯の如く眠れる者、醉へる者を觀そなはす時は冷然として眺むる事は出來ぬ。必ず大慈大悲の心溢れ來りて彼等を呼び醒さずには居られぬのである。即ち法身の佛の境界より衆生を觀そなはせば、是非共慈悲智懸溢れ來りて、救濟の手を下さずには居られぬのである。茲に於てや、佛は本願を起し、修行をなして衆生救濟の身を現じ給ふのである。故に之を方便法身と言ふのである。之れ即ち三身門の報身である。其の報身の本意を人に傳へる可く人生に應現し給ひたが即ち應身である。故に三身は固より相離る可らざるものにして、個々別々に存在するものでは無い。つまり一佛の三方面と申してもよい。而して法身は佛自身の境界であり、應身は全く人生夫れ自身に、應じたる御姿である。宗敎は此の人生より此の佛の境界とを結びつくるものなれば、宗敎としては

報身佛が佛陀の佛陀たる中心にして、此の報身佛の願行あらずんば、衆生救濟の根源がなりたゝぬ。而して阿彌陀佛は實に此の報身佛にして、且つ三世の十方の佛陀の中心である。此の彌陀佛の願行より顯はれたるが南無阿彌陀佛の念佛である。故に念佛と言へば是非とも其如來の本願を信ずるといふ事が眼目となるのである。是れ他力信仰の眞面目にして、法然上人親鸞聖人の信仰の根本であります。故に念佛と信仰といふ問題が起るのであります。

其處で日本支那に通じて、念佛の行はれたる順序に就きて一言せんに、支那に於ては廬山の白蓮社即ち慧遠法師の念佛と、曇鸞道綽善導流の念佛との大體に於て二派があります。前者は當時の名士を結社して、佛者は王者を拜せずと言ふやうなる見識を以て、念佛修行をしたものである。後者は敬虔なる信念を以て、專ら念佛稱名したものである。全體支那に於て念佛の道場としては、五臺山が餘程著しきものであつたらしい。曇鸞大師の如きも、其傳記を調べて見るに、家雁門に近くして幼少の時より五臺山に遊び、神怪靈蹤民の聽きを恣にす、とありて、常に此の靈山に行きて不思議の思想を養つたらしい。全體五臺山は『華嚴經』に出てたる淸凉山にして、文殊の淨土として印度に於て名高きものであつたらしい、現に支那に佛法を初めて傳へた摩騰竺法蘭の如きも、先づ五臺山に止まつたのである。又法照禪師が、五臺山竹林寺に於て文殊菩薩に出會ひ、念佛を傳へたと言ふ事は、著しき事實にして、法然上人の如きは、此事を屢々話さるゝ。斯くて曇鸞の石碑を見て、道綽禪師は念佛に入り、其の道綽の弟子が即ち善導大師である。茲に至つて敬虔なる稱名念佛の一風靡然として支那に行はれてたのらしい。

支那の事は大體此位に止めて、日本に於ける念佛の歷史を尋ぬるに聖德太子を初め、光明皇后、中將姬沙彌敎信等皆念佛をせられたのである、然れども叡山に於ける念佛の濫觴は慈覺大師か入唐して五臺山に上り、之を傳へて來りたのである、是即ち一行三昧常座三昧の念佛である。之より以後叡山に於ては、念佛修行が著しく起つた。殊に橫川の源信和尙に至つて、殆んど一家をなす迄になつた。此の時分の念佛修行の盛なりし事は實に驚くべきものにて、『本朝往生傳』の如き、實に當時の熱心なる念佛者を徵するに足るものである。殊に禪門の永觀律師の如きは、其の敬虔なる有樣、法然上人以前の念佛者としては、源信和尙を除きては恐くは此の人の上に

出る者は無からう。そこで念佛の系統としては、源信和尚は淨土門開闢の前驅者と見てよからう。抑源信和尚は惠心僧都にして、現今遺されたる木像繪畫を見ても、如何に僧都の胸中に描かれたる彌陀觀音勢至二十五菩薩等のみ姿か、森嚴神靈にして、且つ慈悲圓滿の相好であるかを知る可きである。茲に注意すべきは、天臺宗に在つて念佛といふ時は、觀念の念佛が主である。其觀念といふは上に述べたる法身即ち佛夫れ自身の境界にして、所謂十界一如の理を觀念する事である。而して此の理觀と共に佛の相好莊嚴等を觀念せられたのが、木像繪畫等に表はれたのである。此の事理の觀念をする事を天臺宗では念佛と言うたのである。而して其の觀念の外に佛名を稱する稱念の念佛が有つたのである。されど天臺宗では觀念の方を主として傳へ來つたのである。法然上人が幼少の時、叡空上人に師事せられた時、『往生要集』の講莚に待りて、未座より源信和尚は、觀念の念佛に非ずして、稱念の念佛たる事を主張せられた。されど叡空上人は小賢しき小僧かなとて、小枕を取つて投げつけられたといふは、即ち天臺相承の宗義を固守せられたのである。されど法然上人は、幼年の時眼光烱々として、巖下の電の如く、既に絶對他力の光が耀いて居つた。法然上人は『往生要集』の序文を見て、源信和尚の眞意を看破せられた。即ち序文に「夫れ往生極樂の敎行は獨世末代の目足なり、道俗貴賤誰か歸せざるものあらん。蓋し顯密の敎門其文一にあらず、事理の業因其行之れ多し。理智精進の人は未だ難しとせず。予が如き頑魯の者豈敢てせんや。此の故に念佛の一門によつて、普く經論の要文を集む云云。」とある。即ち事理の觀法は出來ぬによりて、予が如き頑魯の者は念佛の一門によるとあれば、觀念の念佛たるべき筈は無い、稱名念佛たる事は、一點の疑ひを容る可き餘地は無い。

此處で此觀念稱念の意義につきて注意すべきことがある。若し觀念といふことは意業である、稱念といふことは口業である、意業ではない、口業であると主張された意味と解すれば大なる誤である。若し意業、口業の別とするときは親鸞聖人が再び信仰を言はれたときに、再び意業に復歸した心持をするであろう。こは意であるとか、口であるとか言ふことが主ではない、こは即ち前章に述べたる律法主義信仰主義の問題である。我等凡夫の心中に佛の境界やら、佛の相好やらを觀念せんとする事は不可能の事である。夫を試みるのが即ち律法主義である。其の律法主義たる觀念を打捨てゝ、敬虔なる

信仰主義の稱念を主張せられたのである。是れやがて後年聖道門を捨てゝ淨土門に入られたる所以である。

斯く法然上人が全く觀念主義を捨てゝ、稱念主義に入られたるには、歷史上上人の先驅者がある。即ち叡空上人の師匠が即ち良忍上人である。良忍上人は融通念佛宗の開祖にして一行一切行、一切行一行、一人一切人、一切人一人、是名他力往生といふが、上人の精神である。是上人晩年大原の里に於て、天啓的に彌陀如來より授かりたる融通念佛の眞髓にして、一即一切、一切即一の融通理觀の根據の上に　稱念佛を主張せられたるものである。歷史的に言へば、良忍上人は聖道門淨土門の間の橋梁と言ふべきである。勿論是れ歷史的に言ふ事にして、若も融通念佛宗夫れ自身丈を以て考ふる時は、請はずして來り、問ふなくして吐くものにして、即ち是れ絶對他力の廻向天啓と言つべきである。されど叡空上人を難ぜられた法然上人の見地より見れば、猶ほ我等凡夫としては不可能なる律法主義の觀念を脫せざるものである。而して法然上人が如何にして遂に專修念佛の稱念主義を唱へらるゝに至りたるかを述べねばならぬ。

法然上人四十三歲の時、善導大師の『散善義』を繙かれたる時、左の文に氣就かれたのが、即ち上人の確信の定まつた時である。曰く「一心專念彌陀名號　行住坐臥不問時節久近、念々不捨者　是名正定之業　順彼佛願故」此の二十八字である。殊に最後の順彼佛願故の文字が、上人の心肝に徹して、一心覈證の時、初めて淨土門の基を開かれた。其意義は如何といふに、從來の念佛は佛を觀じ、佛を念ずるも單に衆生より佛陀を求むる態度で有つたのである、然るに茲て初めて佛願なるものを見出されたのである。即ちもと〳〵佛の本願に於て、此の念佛を以て助け給はんと誓ひ給ひたのである。其處で我等が念佛するは、其佛願に順ふのである。猶ほ適切に言へば、我等が其の佛の本願に信順すれば、自然に念佛が稱へられるのである。故に法然上人の念佛は即ち佛願を信じたる有樣である。是れ本章に念佛と信仰と題したる所以である。

吾人は猶ほ一應此の念佛と本願の關係に就て申し述べねばならぬ。即ち彼の佛の願とは第十八願である。其の第十八願には、若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺とある。即ち單に稱我名號下至十聲と有つて、布施を爲よとも、持戒せよとも書いて無い。念佛ばかりである。『歎異鈔』に所謂「たゞ念佛して彌陀に助けられ參らすべし」とは此の

處である。故に善導大師は其願に順つて、一心專念彌陀名號と申された所以である。法然上人の念佛の特徴は專修念佛である。其の專修念佛はもと〳〵彌陀の本願が專修念佛なのである。其處て其の本願の事を選擇本願といふのである。選擇とは布施、持戒乃至智慧、六念、持經、持咒、發菩提心、孝養父母奉事師長等の諸行を選び捨てゝ、唯念佛の一を選び取つて、之を以て救はんといふ本願を建てられたのである。其故は我等は、布施持戒等の行を行ふ能はざるものである事を佛陀は認め給ひて、斯の如き者を助くる爲に念佛の一つを與へ給ふのであると氣づかして貰ふのである。其處て我等が念佛する心持は、念佛せよといふ仰てあるから念佛するのだといふ律法主義では無い、此の本願によつて、初めて我等は布施持戒等の爲し能はざるものたる事を自覺し、斯の如き我等が爲に成就し給ひし本願なりと信受して、如來に任せ奉るのである。『歎異鈔』に、自餘の行をはげみてほとけになるべかりける身が、念佛を申して地獄にもおち候はゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔も候はめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、地獄は一定すみかぞかし」とあるが之である。斯く吾が身は何れの行も及び難き罪惡深重必墮無間の惡しき者なりと氣付きて、其の者を助けんが爲めの大慈大悲の本願なりと信順したのが、即ち佛の本願に順つた有樣である。故に本願に順つた心の有樣は即ち機の深信、法の深信である。其の心持より現はれ出づる行ひは、即ち念佛である。故に本願を信じて見れば、自然々々に念佛が稱へられるのである。其處で念佛を先きにせずして、信を以て先きとせられたが、即ち親鸞聖人の信心爲本の御勸めである。

以上は法然上人の念佛爲本のお勸めより、親鸞聖人の信心爲本のお勸めの來つた次第を、實驗的に述べたのである。然るに法然上人のお弟子の大過半は、斯の如く法然上人の眞意を受くる事出來ずして、却つて上人のお勸めを律法的に聞き誤まりて、念佛せよとあるによりて、念佛せねばならぬと考へたのである。之れ即ち三百八十餘人の御弟子が、行不退の座に列なつた所以である。法然上人が選擇本願念佛と仰せられたが、之等の多くの人は其の念佛といふ事ばかりに氣が付いて、選擇本願といふ事に氣が付かなんだ。而るに親鸞聖人は其の選擇本願に氣を付けられた。『歎異鈔』に「彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の說敎虛言あるべからず、佛說まことにおはしまさは、善導の御釋虛言したまふべからず、

善導の御釋まことならは、法然の仰そらごとならんや、法然の仰まことならば、親鸞がまうすむね また以て空しかるべからず候か」とある。即ち彌陀の本願を說かれたが其儘善導法然の敎である。されば こそ『正信偈』にも、選擇本願弘惡世と言ひ、又和讃にも、「智慧光の力より、本師源空あらはれて、弘願の一乘ひろめつゝ、選擇本願のべたまふ」とあるのが、此の意味である。斯く選擇本願といふ事に氣を付けて見れは、其本願を信ずるといふ事が根本となつて、是非とも信心爲本とならねはならぬのである。『歎異鈔』に「親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり」とあるが、無意識に此のうつりかわりを實驗的に述べてある。猶ほ言葉を强めて言へば、三百八十餘人のお弟子が律法主義に陷つて、念佛々々といて居る故に、其の律法主義を打破つて信仰主義の光を發するには、是非とも力を入れて本願を信ぜねばならぬと、殊更に形をかへて信を主張せねばならぬ次第である。

偖て此の法然上人親鸞聖人の關係に就いて、充分に理解する事の出來るやうになるには、餘程よく信仰の實驗を味はねばならぬ。私の如きも久しき間心の底に潛みたる疑が有つた夫を著しく言ひ表はせば、法然上人の念佛爲本が他力淨土門の正統とすれは、親鸞聖人の信心爲本は何となく多少異論て有るかの如く思はれ、又親鸞聖人の信心爲本を淨土他力の眞髓とすれは、法然上人は其の前驅者にして、念佛爲本は未だ至らざるものゝ樣に考へられる。言ひ換ふれは親鸞聖人の信心爲本が癈師自立であるか。若くは法然上人が自力念佛であるか、二者何れかであらねばならぬといふやうな、思想が有つたやうに思はれる。而して從來宗學に於て、法然上人と親鸞聖人の間を會通するやり方が、何となく心服する事が出來ぬやうな心地がした。全體會通といふ事が頗る實驗の信仰より見れば面白からぬ言葉である。餘り極端な言ひ分であるが會通といふ事は兩者の間に立つて辯護をするやうな氣持がする。法然上人と親鸞聖人の間が、後學の辯護によつて漸く調和を見出したとあつては、甚だ心服できぬ。而して其會通なるものは、必ず兩者の異なりたる形を强いて同じものにせんと强辯するやうに感ぜられる。例せば法然上人は念佛とは仰せられるけれども、其の眞意は信心に在りと言うて、强いて法然上人の形迄も撓めて、親鸞聖人の形になさんと企つるが如き傾かある。是れ皆念佛とか信心とか、其形の上に拘泥

して、其根本たる本願を眺めぬからである。而して其本願を法然上人は念佛を以て言ひ表はされたが、お弟子の過半が聞き誤まつて、律法的に念佛を主張した故に、親鸞聖人は自然の勢ひ念佛々々と律法的に言ふ可らず、念佛を選擇し給ひし本願を信ぜざる可らずと喝破せられたのである。即ち親鸞聖人は是非とも其の言葉をかへなければ、其の眞意を顯はす事が出來ぬやうになつたのである。寧ろ親鸞聖人は言葉を換へて、信心爲本と言うた處に特徴があるのである。通俗な譬喩なれども、今甲なる人ありて曰はく、秋の木の實は樣々あれど、其の味の美なるは栗に如くものなしと言ひし時、之を聞きたる人が、若し其の言の如く栗を味ひたる人ならば、間違ひなく理解するも、若し其味を味はずして單に其の言葉通りに律法的に之を遵奉したる人ならば、必ず思ふべし、彼の赤き柿にもあらず、彼の青き梨にもあらず、彼のイガ々々栗がよいと、單に其のイガ〳〵を栗と思ふならば、大なる誤である。其の時は栗といふは彼のイガ〳〵の事では無いと、之をむいて中の褐色の實を出し、之の事であると示さねはならぬ。法然上人が念佛と申されたれは、諸行ではない念佛ぢやと、念佛のイガ〳〵ばかりを攫む故に、念佛といふは行者の爲に非行非善なりとイガ〳〵をむきて、念佛即ち選擇本願を信ずる信の一つなりと、實を出されたのてある。之れ即ち親鸞聖人の信心爲本てある。其處て其信心を味はふた人なれば、間違ひはなけれども、之を味はずして信ぢや〳〵と言うて居る人は、恰も栗を味はずして、褐色の外殼を栗ぢやと思つて居るやうなものてある。其處て勢ひ其褐色の皮を再び破りて、栗の肉を出して之を味はへと言はねばならぬ。其の如く親鸞聖人の信心爲本に律法的に服從して、信ぢや〳〵と言うて居るものに對し、蓮如上人は、其信とは後生助け給へと一心に彌陀をたのむ心持ぢやと、栗の肉を示されたのてある。斯の如く法然上人、親鸞聖人、蓮如上人、言葉は變はれども律法主義を打破りて信仰主義を顯はされたのが、即ち各々言葉が變はらねばならぬ所以にして、而もいつでも栗の味ひを示すが如く、いつも選擇本願の親心を頂く事を示されたのてある。此に至つて念佛と信仰との關係は、實驗的に明かになつた積りてあります。

嘆　詠

秋の日

八　風

かつて我が見ぬ
秋の日けふ
かぜ靜けく
息つくもの
絶えて無きごとし。
たゞ天津日の
和光の中に
くはし木の實
木々の枝より
地にぞ落つる、
これやこの
「自然」の收納。

秋の夕

甲　之

さびしら行けど
見るかげに
似し心ばせ。
かそけき搖らぎ
深く沈まむ。

母を思ふ

伊藤桐梧

（雜誌「アカネ」より）

父思ふも現に在さず悔ゆらくな母にせめやと心に思へど。
目しひかも足なへかもと乳根の母が老らく音に聞く吾は。
懇に老の手ひかひそゞろ行く人を見るごとかへりみするも。
老らくの寂しき思ひ押しかくしかへりみすなと告らす母はも。
賜はりし母が手織の絹衣破れ〳〵ど捨てがてぬかも。
桃なると梨の實なると朝よひに吾を思ひまさむ母にあひがたし。
なこ吾と吾は和むな賢し子と母が思はく思へば悲しも。
心には千重に思へど現世ににぶきこの腕母を傷ましむ。
兄はあれどいろれはあれど天離る吾をなづかしむ親心かも。
いづくしき吾が子に離れしことなけば母が心内はかり知らえず。

デヴァスの曲

八　風

休らひ求めて哭けども其をし得ざる
めぐる風の聲なり吾等は、
哀哭、嘆息、歔欷、騒擾、爭鬪、
不定の命はさながら風なり。

何所より吾等は來りて何所へ行くか、
命は何所に起りて何所へ去るか汝は得知らず。
浮虛の靈なる我等は汝の如し。
吾等が不定の痛苦より吾等は如何なる快樂をか
得る。

汝が不變の福慶より汝は如何なる快樂をか得る。
愛着止みなば歡喜ありなむ。
命は風なり、此等はすべて
變りゆく絃に吹ける短き聲のみ。

嗚呼摩耶の子、吾等は世界を廻りてあれば、
是等の絃に向ひて哭く。
吾等は更に快樂しあらず、
多くの悲哀こそ見れ多くの國にて

さはれ哭くと共に吾等は嘲る、
人の執着する此命たゞ空なる影に過ぎず、
宛ら浮べる雲を止め、或は手もて
走る流を堰くが如し。

されど汝が救ふ可き時は近し
悲しき世界は困苦の中に待てり。
眼盲たる世界は群がる痛苦に思はず會す。
起てよ摩耶の子、覺めよ、再びな眠りそ。

吾等は廻る風の聲なり。
休らひ求むと廻れ、汝嗚呼王子も。
恩愛の爲に恩愛を捨て、悲哀の爲に
悲哀を捨てゝ世をし救へ。

白銀の絃を渡りつゝ、斯くぞ吾等は、
いまだ世事を知らざる汝に嘆く。
吾等此所を過ぐるに當り、斯くぞ云ふなり、
汝が戯るゝ妙なる影を嘲りつゝ。

（アーノルド――「ライト、オブ、アジア」）

時報

東北傳道

九月四日青森蓮心寺にて開會、寺は眞宗大學藤井智鎧君の院主代理として傳道を爲す所、人生問題につきて講話す、人皆眞面目に道を求め、內心の要求切實なるものあり、將來頗る有望なるべし、晩涼に乘して藤井君小野君等と共に海濱に散歩す、波濤天を蹴り、來りて岸を拍つ、會心極なし。

五日弘前に着し、佛敎道友會員一同の出迎を受け、學校に於て講話す、五六七の三日昼夜二回、講本は聖德太子十七憲法、にして人生問題と信仰との關係を說きて特に眞諦世諦の關係につきて詳辨す、當時殿下行啓の前にして準備多忙たる時たるにも拘らず、眞面目に道を求むるの人多し、其間藤崎道交會支部の爲に昼夜二回の講話眞宗婦人會の爲に法話を爲す、同地藤野君は君が兼學部時代に於ける知人也、二十餘年にして相遇ふ、殆んど隔世の感あり、七日晩發起者一同の懇切なる晩餐を受け八日朝出立す。

八日窓外の森林を眺めつゝ青森まで尋ね來たまひし小林伊藏氏に大館停車場に遇ひ、能代に着す、和田龍造兄遠く來り迎はる、平素東京にて親しみつゝあるも特に君が故郷に遇ふ、一段の趣味と厚情を感せずんばあらず、下妻忍超君の寺に宿す、君は予が敎校時代の舊友也、懷舊の情禁し難し、昼、各宗共同の佛敎會に於て講話を爲す、其會の基礎鞏固にして發達せる稀に見る所、土地實業の勃興と共に將來有望也、夜和田兄の家を訪ふ、又文學會の爲に一席の講話を爲す、翌朝亦和田兄の見送を受けて出立す。

九日秋田に着す、笹原貫軒君迎はる、恰も村上專精師講話會開會中也、師と共に午前秋田婦人會の爲に武德殿に於て講話す、勝鬘夫人を理想とせる聖德太子の家庭につきて述ぶ、午後中學校講習會に於て予が信仰の實驗につきて講話す、東北佛敎團の主催也、同夜及翌十日淨願寺及ひ佛敎青年會の爲に講話す、其午後土崎尙德會に於て二席の講話を爲す、同地は一般老若頗る信念の勃興せる有樣大に感ずべし、特に同朋同信の人々待受けらる、實に舊相識と相語るが如し、海岸に散歩し小丘に上りて滿月を望む、夜特に晩餐を共にし、信仰を語る、東北の氣風と將來の希望につきて語る、感謝極なし。

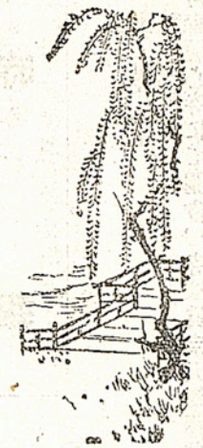
十一日朝大曲に着す、板先敎瑞氏及ひ其信徒に迎えられて氏の安養寺に着す、昼は婦人會の爲に講話し、夜は公衆の爲に講話す、青年求道者多し、瀧本氏小西氏を初め來訪多し、庭外山勢崎嶇として趣あり、十二日朝名にし負ふ秋田の黃熟せるをながめつゝ幾多の墜道を通りて山形に向ふ。

十二日、新庄に着す、本澤氏に迎えられて昼夜講話す、地はこれ六年前の舊知己、家は恰も我家に歸りたるかの感あり、感謝欄に記するが如し。

十三日　山形に着す、堤鳳麟君、原君父子、原田中庸君、岡田彌作君等を初め多數の御同朋、膝を交へて大悲を語る、昼は唯法寺に法話し、夜は村井家に法話を爲す、家人信念濃か

にして感謝極りなし、翌十四日堤君と共に長崎佛教道友會にて講話す、是亦感謝欄に記するが如し。

十四日晩御同朋の熱心なる見送を受け、車中習學君と語りつゝ汽車郡山に着す、乃ち之に一泊、翌十五日朝岩越線を經て若松に着す、三ヶ月の傳道の最終として四日間若松御同朋と敬虔なる信念、堅實なる交盟、和樂なる團樂の間に大悲無限の慈愛を感謝するを得たる喜極なし、宿はこれ三年來の舊知たる清水屋、御同朋は十年一日の如き會津人、時は恰も殿下還啓の後、講話は十七憲法、會場は常設求道會、會津城頭正に秋風落葉を吹き壘壁にはへる蔦は紅正に闌なり、實に思出多き會津なる哉、四日間晝夜講話を爲し、又一日和泉氏主宰の織物工場に於て、監獄に於ける修養會に於て講話す、十八日夜晩餐會を開かれ、生龜日報社長を初め熱心に來聽し給へる人々の厚意を蒙ること尠からす、十九日朝、慈愛溢るゝ見送を受け、慈光の裡、稱名感謝の間に歸京の途につく、南無彌阿佛陀。



求道會館設立趣書意

發起者　近角常觀

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ、一般に道義の制裁弛み去りて皆嚴格なる實行を想ふ、此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を擯まむとして胸中幾多の苦悶を抱き、社會實務の人にして志操清淨なるものは其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。

仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なる信仰は未だ嘗て見ざる所也。

鳴呼咋年已來聊か此の時運の必要に應ぜむとする微志あり、先輩の企てられし跡を引繼ぎて、一方には求道學舍を設け、此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め、また一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潜めて信仰の問題を講じ、互に心靈の修養に從ひしが、幸に佛陀冥祐と師友同情とによりて其期する所空しからず、學舍は常に滿員にして幾多人々の申込に負き、假會場なるに充てたる居間は狹隘なるを訴へて求道の友の勸告に從ひ、餘儀なくされたり。此に於てや止むなく、懇切なる道の急に充てむと欲す、學舍を擴張し、會館を設立して以て焦眉の忠實なる親友ノ贊助を仰き、幸に着手の至願也。

從來一都に於て佛教徒に屬する會館の設なく、其不便を感ずること實に尠からず。而して屢々計畫せられて、未だ容易に實行の緒につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして、適宜の完全を期するに必要に應すべき適當の會館を設立するに先づ現時の必要に進むること、是なるも、其大なる建設を企圖して佛教者一般の需要に充て且つ清潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初として、幾多の社會的施設を詳細調査し來りて、此等の事業の我國佛教者の手に成らむ事を望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得ば幸之に過るなし。冀くは四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむことを謹て白す。

明治三十六年十月

近刊豫告

近角常觀著

人生と信仰

定價參拾錢
郵稅四錢
袖珍美本

目次

第一章　人生問題と信仰
第二章　悲觀思想と信仰
第三章　倫理力行と信仰
第四章　犯罪心理と信仰
第五章　社會主義と信仰
第六章　國家秩序と信仰
第七章　世界宇宙と信仰

本書久しく品切にて愛讀諸君の高需に背き居り候ひしが今回漸く訂正改版近日を以て發行の運びに至りたり。本書の內容は既に諸君の知了せらるゝ處、吾人は世の信仰問題に對し未だ何等の經驗なき諸君に、特に本書の一讀を希望するもの也。

近角常觀著

親鸞聖人の信仰

定價七十錢
小包八錢
クロース綴美本

本書は嘗て本誌に連載せる、眞宗慶歎に大訂正を加へて一書に纏めたるものなり。絕對他力信仰の大權化たる親鸞聖人一代の敎證に對し、著者が平生抱懷せる渴仰、尊崇、憧憬の至情は本書に溢れて余蘊無し。

取次所　本郷區森川町一、振替口座一六六九六番　求道發行所

月刊雜誌

靈光

靈光第二年第十號目次（十月一日發行）

△一部三錢五厘△半年二十錢△一年三十六錢△海外一年三十錢
△郵稅共見本四錢
△前金に非れば發送せず△振替送金には口座料二錢添へられたし

時論　◎步々光明の際　石同人
講話　◎鼎中沸々　石同人
修養　◎徒然のとき此言を思へ　前田慧雲
宗教說聽の教訓　南條文雄
嘆佛　◎佛子の使命　向島了
◎人生と其終極　近藤最證
感謝　◎秋七句　屋天水
◎夏五句　若樓
◎子規忌席上吟　榮
◎祖母終焉の靈感　近藤純悟
◎吾等は何時救はるべきか　佐々木祐言
家庭　◎臺所と家庭　栗岡水舟
抄錄　◎「鎭勸用心」は有り難き御文也（近角常觀）◎婦人の六德（加藤咄堂）◎家庭教育の根底（高木櫟堂）◎信仰と成功（安藤州一）
葉報　◎神戸だより◎姫路だより◎和歌山だより◎旅順だより◎大連だより◎讀者欄◎新刊紹介

發行所　神戸市中山手通四丁目　振替口座一〇五一〇番　靈光社
賣捌所　京都西六條　振替口座四一一二番　興教書院

清澤滿之師序　近角常觀著

信仰之餘瀝

（拾壹月初旬中に發行）

第拾版

改正定價　一冊金卅錢　郵税四錢

増補訂正

久しく品切なりし本書は、彌々今回大訂正大増補、根本的改善を加へて信友諸君に見え奉らんとす。改善の主なる點は左の如し。

内容の増加

著者は本書の完全を期する爲め、新に増補する處六章、殊に著者自身が爾後の信仰經過を告白し、如來の加威力を感謝せんが爲に、附錄として『予が信仰的實驗』の一篇を増加したり

改版訂正

本書は既に九版を重ね、發行部數一萬以上に達し、版毎に訂正を爲せりと雖も、猶ほ遺憾の點尠からざるを以て、今回は全部を組み直して著者自ら誤植訂正は勿論猶ほ文句の上にも改竄する處少からず。

製本體裁

成る可く華美輕薄をさけ、質素堅實を旨とし、初版の體裁を維持するに努めたりと雖も、紙質製本等に於ては、充分の注意を加へ、從來發行のものに比しては、遙に一段の改良を加へたり。

代金既送ノ諸君ニ謹告

斯の如くにして本書は、其内容に於て、其の外形に於て、根本的に面目を一新するに至れり、若し夫れ本書の價値如何に至りては、著者近角が入信臂頭に於る告白感謝の結晶として、既に諸君の知り給ふ處、願くは我が同胞諸君、一讀再讀の榮を給ひて、如來救濟の大事實に着目し給はん事を謹みて白す。

前記訂正改版の爲め改正定價金卅錢郵税四錢と致し候。就きては從來拾五錢定價にて御申込の諸君は、本書御落手と同時に、不足代金早速に御送附願上候也

發行所　東京市本郷區森川町一番地　振替口座一六六九六番　求道發行所

急告

近角常觀著

信仰之餘瀝要略

定價金五錢　郵税金貳錢（但し三冊迄は郵税貳錢）
五十部以上二割引

右は今回さる御方の御依囑により「信仰之餘瀝」中の眼目、宗教的同朋、信界に於ける監獄、以下數章を拔萃し、施本用小册子として印刷刊行の豫定に候、就ては他に御同志の諸君も有之候はゞ、印刷部數等の都合も有之候に付、早速御入用の部數御申込被下度く、傳道用施本としては確に適當の者ならんと相信じ候也

求道發行所

懺悔錄

第四版　定價貳拾錢　郵税二錢

此書は著者が平生手を離さゞる親鸞聖人の教異鈔の眞髓を、自己の實驗をはじめ、王舍城の悲劇等の人生の事實の上より何人にも解かりやすく説示したるものにて、本書を讀みて入信せる人少からず

規定

一　本誌は毎月一回一日發行とす
一　本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一　本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
一　郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一　郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
一　凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一　本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一　回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一　本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊に付五厘
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	

廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

明治四十一年九月廿七日印刷
明治四十一年十月一日發行
發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所　求道發行所
（振替口座一六六九六番）
大賣捌所　東京市神田區表神保町　東京堂

前號要目

求道

◎如來を信ぜずば人生何事も成る事なし　武藤金吉

◎他力信仰の淵源　一　佛教と念佛（下）　笠木輔一

感謝

◎曠原の觀想　甲之

◎小米國　左千夫

◎野外の感謝　在来

◎悉信施　配

◎梁川師を憶ふ　哉

講話

◎人生の根本義　近角常觀

告白

◎絶大なる佛力

◎安心問題に苦みて信仰に至る

歌詠

◎秋となりぬ（長詩）

◎心のうごき（短歌）

◎秋風雜吟（俳句）

時報

◎北海道傳道

求道第五卷第拾號　明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可　明治四十一年十月一日發行（毎月一回一日發行）

東京市麻布區笄町三ノ一三　三宝堂印刷